

ロリババアの道程

穢銀杏

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

それでも もがき 生きるのじや。

※十一年前、Arcadia様に投稿していたSSに、若干の手を加えたものです。

※性別・女性、ボイス14を基調としたキャラメイク。

目次

| | | |
|----------------------------|----------------------------|----|
| B U R S T 編 | B U R S T 編 | 本編 |
| P a r t 2 | P a r t 1 | — |
| 106 | 45 | 1 |

本編

自分の口調が同年代の少女達のそれと比べていささか以上に奇異なこと、誰の指摘を待つまでもなく、むろん彼女として気が付いている。

自己の客観視もまともにこなせぬ幼児性とはとうに縁を切つたのだ、無自覚でいられるわけがない。過不足なく理解して、その上でなお、彼女は矯正を選ばなかった。我が身に宿る奇天烈をそっくりそのまま肯定し、今日まで歩み続けてきたのだ。

簡単なように見えて、これが存外難しい。胆力を要する。

初対面の相手は十中八九顔と口調のギャップに戸惑い硬直するし、ある種の変人だとレッテルを張られるのも避け得ない。どうしても色眼鏡で見られてしまう。

そのあたりを危惧してか、面倒見のいい仕事仲間が寄つてきたのも一再ではない。どこで発掘したのやら、前時代のマナー事典を片手に持つて迫りくる、お調子者までいたものだ。

(あやつらは根っから好意の心算つモリなんじゃろが、こればっかりは、どうも、のう)

如何に世間並から外れていようが、彼女にとってはこれこそが地。キャラ作りだの何

だのではなく、通常の喋り方、大仰な言葉を敢えて使えば本性である。それを態々曲げ直す苦勞と、しばらくの間羞恥心と画一化への欲求に耐えること。どちらの方が精神の磨耗は少なくて済むか、彼女は彼女なりの慎重さで天秤にかけ、結果後者を採ることにした。

人間には慣れという、たいへん便利で厄介な機能が生得的に備わっている。最初は違和感に眉をひそめる刺激でも、連日連夜、繰り返し同様のものに曝されるうち、やがて感覚は鈍化して、ついには何も感じなくなる。それが当たり前のものとなる。

ゆえに彼女は、しばらく耐えさえすればよいと見積もった。予想通り、今となつてはもう誰も、彼女の口調を異としない。むしろいまさら世間並みの言葉使いに直した日には、十人が十人、驚きのあまりすわ天変地異の前触れかと腰を抜かすに違いない。

早い話が、日常の中に溶けきった。

お陰で彼女は目下のところ、何ら気負う必要の無い悠々自適たる日々を送れているというわけだ。

(うむ、安気安気。やはりこうでなくてはな)

それはそうだろう、ただでさえ戦場暮らしの身の上である。

生と死の境界が限りなく薄まる異常な「場」へと年がら年中突っ込まされて、それだけでももうストレスを溜め込むには充分なのに、この上さらに分厚い仮面を被せられては

たまらない。真剣に窒息の危機である。気の抜きどころがないではないか。心の疲弊がやがてミスの呼び水となり、ドミノ倒しきながらに大失態を誘発し、取り返しのつかない欠損、破綻、死にでも至ろうものならば——ああ、これほど馬鹿げた話もあるまい。そんなマイナスのわらしべ長者みたいな話は金輪際ごめんであつた。

※ ※ ※

戦場。

上の単語は、比喻で用いたわけでない。純粹にそのままの意味で使つたまでだ。

彼女の職場、一日の大半身を置くところは、この上なく命の軽い戦の庭なのである。

と言つても、その戦争は人類が遙か太古より飽きもせず延々繰り返してきたそれである。

アラガミという、冗談染みた超生命体との種の存亡を賭けた闘争なのだ。勝つか負けるかではなく、喰うか喰われるか。講和の余地なく、捕虜条約も有り得ない。兵士と市民の区別だと？ 寝言は寝て言え、期待する方が間違つている。同類以外は皆殺す。互いに絶滅させる気で向かい合わなければならぬ。自然界の法則にこの上なく忠実な、言うなれば生存競争の一種だろうか。ともあれ人間同士の戦いとは根本を異にしていよ

う。

で、肝心要のその中身、戦況はどうなっているかというところ、これが人類に大いに不利。その一因として見逃せないのは、やはりアラガミに対して既存の兵器、その一切が通用せなんだことだろう。

これはアラガミの肉体が「オラクル細胞」と称される特殊至極な細胞群から成り立っているに起因する。常軌を逸した強靱さとしなやかさを兼ね備えたこの結合を破壊するには、銃だろうが爆薬だろうが、それこそ「核」であろうとも、とてものこと歯が立たぬ、役者不足であつたのだ。

そんなデタラメな細胞があつてたまるか、と言いたくなる気持ちも分かるが、現実としてここにあるのだから仕方が無い。

こうした次第で、こつちからの攻撃は微塵も効果がなくせに、あつちときたら紙細工でもひつちやぶくような容易さでこちらをぶち殺せるという、闘争に於いて最大級の悪夢が地上に具現した。

戦車はティツシユの空き箱で、シエルターはまあ、いいとこデコレーションケーキだろうか。アラガミの食欲は有機無機の区別なく、文字通りなんでも平らげるのだ。

対抗手段がない以上、人類としては敗北するより他にない。

その個体数はいつそ笑つてしまいたくなるばかりの速度で激減し、国家は軒並み機能

を停止。先人たちが心を砕いて築き上げ、歴史の滲みた大都市は、アラガミどもの口腹をいつとき満足させんがための単なる餌場と化し去った。朽ちて廢墟となるほうが、まだしも救いがあったらう。

そんな世の中なものだから、ただでさえずっとありがちだった二束三文の悲劇というのが、いよいよ無料配布でも始めたみたいに大発生するわけである。

(そう、別に珍しいことではない)

親を、兄弟を、親族を、友を、およそ頼るべき一切を亡くして天涯孤独の境遇に墮ちる子供など、この空の下には掃いて捨てるほど存在するのだ。

彼女もまた、そんな変わり映えのない、よくいる餓鬼の一人だったらしい。

らしい、といったのは彼女の記憶の何処を探っても父や母と共にあった映像が見つからないためである。ここから推測するに、彼女はよほど小さな——それこそ赤子同然の時分に於いて両親を亡くしてしまったようだ。果たしてそれは幸いなのか不幸なのか。

「愚問を唱えるのう、幸運だったに決まっところうが」

容赦なく一刀の元に切り捨てたのは、祖母を名乗る老婆であった。

彼女と老婆の間に血縁関係があったかどうか、今となつてはもう永遠に確かめる術は

無い。が、

(なかつたと見て間違ひなからう)

と彼女は合点していた。

もし本当に血の繋がりがあつたとすると、必然彼女の死んだ両親、そのどちらかは老婆にとつて実子にあたることになる。にも関わらず、かくも冷静に淡々と、その早逝を幸運と言い切れるものだろうか。

(否、断じて否)

祖母がそんな人間ではないことは、共に暮らした彼女自身が誰よりもよく承知している。

(あの婆様なら親より先に逝くなど何事か、これ以上の不孝はないと激怒する。その裏に同量の悲しみを抱えながら。そういう人だ)

何故両親が早くして死んだのが幸運なのか、その理由を問うと祖母は莞爾と笑つてみせて、彼女の小さな頭の鉢をぺしぺし叩いた。

「今回は教えてやるがの、次からはもつと自分の頭で考えるようにするんじやぞ。おうおう、ようけ中身の詰まつとるいい音がするわい。せつかくこうまでみつちり詰まつてるんじやから、使わにやあ損じやないかえ」

とどめとばかりに祖髪を滅茶苦茶にかきまわしてゆく。しなびた手がわさわさと蜘蛛

蛛のように蠢きまわるあの感触を、今でも頭皮が記憶している。

「なあに、至極簡単なことじやて。お陰でお主は変にひねずにすんだ。もしあと何年か遅れ、父母の愛を理解出来るようになってから死別を味わわされてみよ。やわなお主の精神は激烈な感情の濁流により壊れるか、最低でも何らかの歪みが生じておつたに違いない。そんなものを態々拾つて形を整え直してやるほど、わしはお人よしではないわ」

いくら愛を注がれようと、それを認識出来ねば何にもならない。

憎悪や憤怒、悲嘆といった感情は何かを奪われてこそ発生するのである。逆に言えば、真実何も持たぬ者にはどうしたつてその手のものは感じられない。

出会つたばかりの頃の彼女はまさしくそんな状態だった。何を失つたかも分かつていない、まつさらで素直なままの生地。だからこそ祖母は彼女を放置せず、庇護し養育したのだと言う。

「でも」

泣きそうな声であつた。彼女の胸には何やら自分がひどく下劣な不貞を犯しているような、やるせない気持ちに次から次へと沛然として湧いており、声にでもして排出せねば五体がいまにも破裂しそうであつたのだ。

「でもそれじゃあ、いくらなんでもととさまとかかさまが——」

——哀れではないか、と言いたかつたのであろう。されどまだまだ発展途上、貧相な

語彙力が仇となる。どうしても相応しい言葉を発見できず、彼女のべそは余計、いつそ
う、加速した。

「報われず、哀れじやと。なるほどのう、よくぞそこまで気が回った」

だから、祖母がその言葉を代弁してくれた時は本当に嬉しかったし、救われたような
気さえしたのだ。

「そう思うのは決して悪いことではない。むしろこんな時代によくぞかくも真つ直ぐ
育つたと、わしア鼻が高いわい。しかしじやな、気に病むのあまり無用に自責を積み重
ね、ついには自虐へといきつくような真似ばかりはよすんじやぞ。あんなものは百害
あつて一利なし、どうしようもない最底辺の人間がするもんじや」

「うん、わかってる」

自虐についての講釈はそれこそ耳にタコが出来るほど聞かされていたので、彼女は太
人しく頷いた。

「お主が両親に報いたいと欲するなれば、月並みじやが精々必死に生き抜いてみせよ。
それが唯一、父母の死を無駄死にに墮とさず、注がれた愛への感謝を形にする方法じや」

ああ、そうだ。祖母はいつも彼女に対して二言目には生き延びろと説いていた。

「よいか、必要とあらば例え相手の靴を舐めてでも生にしがみつくんじや」

「冗談じやろ、そげな誇りもなにもあつたものではない真似をしてまで、わしア生き延びたくないわい」

舌つ足らずな喋り方はなりをひそめ、自我の芽生えが見えてくると彼女は時折祖母の教えに反発するようになった。

「たわけえつ」

すると祖母は、荒れ果てた荒野のような顔を真つ赤にして怒鳴るのだ。

「小娘がさかしらなことを抜かすでない、誇りの意味も分かちやらん分際で」

「なんじやと、老いぼれが」

「本当に誇りがあるのなら、一時の屈辱くらいなんじや。頭を垂れつつ腹の中には殺意を溜めて、逆襲の時まで耐え忍ぶのが正道じやろうが。それを沸点低く、簡単にぶつちぎれてどうする。無為に死ぬだけなのは火を見るよりも明らかではないか」

お互い興奮して、いつ胸倉を掴んでもおかしくない雰囲気である。意見が食い違つと、彼女らは万事この調子だつた。

「機が来なかつたらどうする、いくら待てど暮らせど来なかつた場合は。こんな事ならあの時暴発しておれば、と悔いながら生きよとほざくんか」

「屁みたいなことを抜かすでないつ。己が踊る舞台ぐらい、手前で築く意気がなくてど

うする」

受動的にただ待つのではなく、能動的に自ら動いて機を作れという意味だろう。

「昔日の平和だった時代ならわしもこんなことは言わん。当時は口でなんと言おうが、実際に命の危機に晒されることなど皆無に等しかったからな。が、今は違う。今日びお主のように死を飾りたがる大馬鹿は、本来三日も生きられん世になつてしまったのじゃ」

平和な世界で前半生を送つた祖母だからこそ言える、実感籠もつた言葉だった。アラガミに世界が貪り食らわれていく、その一部始終を老婆はいつたいどのような心境で見届けたのか。

「酔つ払つて安易に死のうとするな。そんなものは所詮、過酷な現実には立ち向かえない臆病者の逃げに過ぎぬ。真の強者とは、例えどんなに長く険しい道のりであろうとも、その途中で如何に屈辱そのものな、糞土に塗れる思いをしようと、決して初心を投げ出さず、歯を喰いしばつて前に進める者をいう。よいか、生きることから逃げるでないぞ。とりあえず生きてさえいれば、どれほどの苦境・苦難であろうといつか跳ね返し得るんじゃないからな」

当時の彼女にはさして響かなかつたこの言葉が、いつの間にかその背骨——髓を貫き五体を支える信念にまでなろうとは、当の祖母自身思わなかつたに違いない。

このように彼女を守り、多くを与えた祖母が、ある日死んだ。

死因は老衰、生きとし生けるおよそ全ての宿命である。病的な生存至上主義から危機察知能力におそろしく長け、それをフルに活用することにより、幾度となくアラガミの爪牙をかわし続けた祖母であっても、自分の寿命からだけはついぞ逃れ得なかつた。

「随分遠回りを重ねたものの、わしはついに辿り着いた。見よ、我が勝利はここにあり」
彼女に手を握られながら、祖母が残した最後の言葉。

ひどく抽象的で理解し難くはあるが、その声色から、その表情から、籠められた想いは自然じねんと伝わってゆくものらしい。

祖母は真実満たされていた。最早この世に何の未練も残っておらぬと、晴れ晴れとした穏やかな心で最期を迎えたのである。

枯れ木のような祖母の身体が、この時ばかりは内から光輝いているかのように彼女の瞳に映つたものだ。

「――」

力が抜け、だらんと垂れ下がった腕。

物言わぬ亡骸と化した祖母に縋りつき、彼女はわんわん泣きに泣いた。

彼女にとって祖母とは親であり教師であり、またかけがえない親友でもあった。彼女の半分は祖母のものと言っても過言ではなからう。

故に血の繋がりがあつたとか無かつたとか、そんなことはどうでもよい。些末、二の次三の次以下の事項に過ぎない。彼女にとってあの老人は、どこまでいつても絶対的に祖母なのだ。

然らばこの反応は当然、健康な精神性の発露に他なるまい。愛する者の喪失とは、斯くも重かりしものなのだ。

(なるほど、婆様の言った通りじゃ)

自然死、それも考えられる最高の逝き方をされてもこれである。もしもアラガミに捕喰されるとか、その手の理不尽極まりない無念の死を目の当たりにした暁には、心の一つや二つ程度、ぶっ壊れてもなんら不思議でないだろう。

祖母の言った通り、そんなものを認識せずにすんだ己は幸運なのだ、彼女はこの瞬間に及んで漸く真に理解した。

祖母が死んでしばらくすると、当たり前前に彼女は飢えた。

遺産を頼りになんとか細々と食い繋いできたとはいえど、元々たかが知れている額の

上に収入が一切無いときた。これではいくら節制を心がけようと、底が見えてきてもうのは道理だろう。

何かしら職に就こうと足掻きもしたが、十代前半の幼さで発育ぶりもさしてよくない彼女を敢えて雇用する、物好きな職場は何処にもなかった。それはそうだろう、どう鼻根目に眺めても満足に仕事をこなせるとは思えない。男子に生まれついていたら、まだしも見込みはあったのだろうが。

(これはいよいよ、身売りを考えねばならんかな)

が、絶望するにはまだ早い。女には売るものがある。ちよつと男に真似のできない仕事というのも、確かに存在するではないか。

今でこそみすぼらしさの具現だが、なあに、素材は悪くないのだ。ほんの少しの研磨剤——栄養と化粧を投入すれば、充分人並み以上にはなる。更に付け足すのであれば、そちらの業界には彼女のような未成熟な少女にこそ興奮する客も多いとか。

散々足を引つ張つてきた属性が、悉く武器に変わるとは、いったいなんたる皮肉であろう。

このまま窮迫からの脱出口が見付からないのであるならば、本当に墮ちるも已むを得ず——と血を吐く思いで決断しかけていた時分。彼女に一つの、決定的な転機が訪れた。

※ ※ ※

目下地球で人類が生を繋げる場所と叫びたら、フェンリル謹製「ハイヴ」以外にあり得ない。

主神を喰らう魔狼の御名を表看板に引つ提げる、彼らは他のどんな団体・国家より、オラクル細胞の深奥に通曉した機関であった。

なればこそ、大抵のアラガミが喰らうを厭う特殊防壁を開発し、その素材により支部の周囲をぐるりと囲む、安全地帯の創出さえも可能としたわけである。

このようにして確保された領域こそがすなわちハイヴ。世界各地に点々と建設された希望の巣穴。もつとも水漏れはしよっちゅうで、中枢に棲むフェンリル基幹要員でもない限り安息とは程遠い、薄氷の上の希望であるが。

彼女が生まれ育つたのは、極東に作られた第八ハイヴ。計十四万もの人間を擁する、半径千四百メートルの巨大な構造体である。これだけの人間がひしめき合っていたならば、貧富貴賤——格差が蘊醸されるのは、考えるまでもなく自明であろう。

悲しいかな、完全環境都市たるハイヴにも宿命的に吹き溜まりは発生するのだ。

住民同士の強盗強姦は当たり前、三日に一度は脳の煮立ったカルト野郎が怪しげな集

会を開催し、運なく腕なく攫われてきた生贄が哀れな悲鳴を響かせる。いつそアラガミに殲滅されてしまえと良識ある層の大部が考えている悪徳の温床。

そんな場所で起こったとある事件の容疑者として、あろうことか彼女が拘束されてしまったのである。

(冗談ではないわい)

濡れ衣を着せられた彼女はあまりのことに呆然としつつも、同時にどこかで安堵していた。

進退窮まり、とうとう身を売る決意をかため、残金はたいて少しでも血色・肉付き・総じて見栄えをよくするために、比較的豪勢なめしを搔つ込んだのが前の晩。一睡もできず朝を迎えて、濡れ手拭いで身を清め、家と呼ぶ掘つ立て小屋から這い出した。

人の皮を被った獣、暴漢どもに見付からぬよう抜き足差し足忍び足で息を殺して掃き溜めの奥へひた潜る。ややあつて、けばけばしいネオンサインが見えてきた。木製の、しかし金属質な光沢のある扉に触れて、さあいよいよだと喉を鳴らした一刹那——

「全員動くな！」

すぐ横合いの闇だまりが、武装した屈強な男どもを前触れなく吐き出した。伸ばした腕をなすすべなく捉えられ、振じ上げられてそのまま地面に抑え込まれる。フェンリル職員殺害容疑がどうたらこうたら言っていたような気がするが、要するに悪い時に悪い

場所に居合わせてしまったという話だろう。

(ここまで思い通りにならぬか、わしの人生)

悲愴な覚悟は宙に浮き、肩透かしだけが残された。

脱力するのも無理はない。

所詮こんなのは先延ばし、肢体を蹂躪されるのが僅かばかり遅くなっただけと分かっているが、それでも心の籠が緩んでしまう。もつともこの嫌疑が晴れなかった場合、純潔どころか命まで奪られる公算が大であったが、

(大丈夫じゃろ、フェンリルとて無能ではない。早々に誤認逮捕と判断してくれようぞ)
楽天的な考えである。むろん、本心からのものではなく、こう思い込もうという自己暗示の一環だ。

生殺与奪の権限はとつくに他者に握られている。涙ながらに無実をわめき、ガタガタ格子を揺らそうが、エネルギーの浪費にこそなれ、事態はちつとも好転しない。

打つ手はない。

何一つない。

ならばいつそ開き直って、無一物な自己の外側、幸運の女神の慈悲に賭けよう。禍福は糾える縄の如し、悪いことの次にはきつと善いことが起こるのだ。やけくそと呼びたくば呼ばばいい。悲観に意気を沈めるあまり気鬱にかかりでもしたら、それこそ最悪で

はないか。助かるものも助からなくなる。

ゆえに彼女は、ひたすら思考を楽天的な方へ方へと押し上げる。これもまた、生き延びる術の一つなれば。

ところが事態は彼女の予測を遥か斜めに上回り、まったく思いも寄らない軌跡を急速に辿りつつあった。

——おいおいなんだよ、この数値。なんでこんなのが今まで見過ごされてきた？

——フェンリルの管理体制にも、まだまだ穴があるってことだ。

——もっと網目を密にするよう、上に提言するべきか？

——検体はいくらあっても困らん、言うだけ言ってみるのもよかろう。だがまずは、目の前のやつに集中しようか。

牢に叩き込まれる直前、手続きとして経た検査。そこで採取された彼女の生体サンプルが、係員らを狼狽させた。驚異的と呼ぶしかないほど際立った、神機との適合性が確認されたのである。

左様、神機。

これぞ人類存続の鍵。絶対の捕食者たるアラガミに対し、泣きたくなるほど貧弱なホ

モ・サピエンスが抗し得る唯一の法理に相違ない。

その正体は簡潔に言う、「人為的に調整されたアラガミ」だ。アラガミと同じオラクル細胞によつて構成されているがゆえ、連中の強力無比な細胞同士の結合を「喰い破る」ことで破壊する。

毒を以つて毒を制す、鬼を斬るため鬼となる。なんのことはない、脅威と相対した際は人はいつもそうしてきたではないか。言つてみれば使い古された手だ。

神機を扱う者が神機と文字通り一体化し、半アラガミ染みたモノへと化するのも鳥瞰すればまったく自然だ。何もおかしいところはない。

ただ、希望さえすれば誰であろうと神機使いになれるわけではない。完全に先天的な資質が必要となる。

ざつとくばらんに述べてしまうと、この資質とやらが適合性だ。これを有さないにも拘らず無理に神機を持つとすると、神機はたちまち制御を振り切り、アラガミの本性に立ち返り、身の程知らずを捕食して、後に残るは肉片ばかり、そういう酸鼻な仕儀になる。

実際問題、ひとむかし前の技術が未熟な時代には、珍しからぬ事故だった。

「ははあ、わしにそんなものが」

そして彼女が秘めていたのは千篇一律の適合性とどまらず。

開発されたはしたもの、こと極東に於いては扱える者いまだ皆無な、「新型」神機との適合性に他ならなかった。

故に驚異。故に僥倖。戦力の増強もさることながら、貴重なデータを吸い上げるモルモットの価値すら有す。願ってもない掘り出し物であつたらう。フェンリルはその名の通り餓えた狼さながらに、この「肉」めがけて喰いついた。

(愉快痛快。まっこと人生とは分からぬものよ、よもやこのような形で風穴が開くとは) 神機使い——ゴッドイーターが如何に危険で命の軽い職種なのかは彼女とて、重々承知の上である。

と言うより、知らぬ者こそ面妖だろう。タイムスリップを疑われてもおかしくはない。ハイヴの住人であるならばごく当たり前に身に着けていて然るべき、一般常識の領域だ。

ゆえに、神機との適合性が見つかりながら、嫌だ俺はやりたくない駄々をこねる手合いというのも少なからず居るという。

が、その反面給金は高く、衣食住に至るまで、相当高水準な手当てがつくのがゴッドイーターなる商売だ。彼女の如きド貧民にしてみれば、これは天界の境遇といつてしまつても差し支えまい。

中にはこの好待遇を指して特権階級だと悪し様に罵り、目の敵とする輩もいるが的外

れも甚だしい。骨を折った者がその報いを得るのが道理なれば、仕事の難度に従って報いが肥大してゆくのもまた道理。なにと向き合わされているのか勘案すれば、これでも安過ぎるほどだ。

いずれにせよ、適性が発見された時点で逃げ道など存在しない、涙と唾を撒き散らし、身をよじつて抵抗しようがフェンリルはその悉くをへし折つて、無理矢理にでもゴッドイーターに仕立て上げる。

戻り道がないならば、猛然と前方に突進するのがまだしも活路に近からう。

角度によっては生活の場と強力な牙をいつぺんに手に入れられたのだ——と、そのように見えないこともない。

(ならば、喜べ)

彼女はまたもや、自己への命令者になった。

(餓死も戦死もわしア御免じゃ。こうなれば、我が命を脅かすのなら例え神であろうと塵殺してやる)

狂気の域に達して久しい。

彼女の中の、生に対する執着は、だ。

卸元たる祖母はといえば、未来予知と見紛うばかりの危機察知能力を開眼し、アラガミによる襲撃をすんでのところまで免れること、ほとんど三桁の大台に及んだ。

それが意味するところはすなわち、第六感の鋭敏化に相違ない。

不吉な予感、虫の知らせ——そうしたものを度外れた感覚で感じ取り、かつその直感に躊躇うことなく身を委ねられる度量および胆力が、あの老躯には備わっていた。だからこそ天寿を全うするという、このご時勢においては至極希少な最期を迎えられたのだ。

では、その特性をそっくりそのまま受け継いだ彼女が戦場に出ればどういうことになるのであろう。答えが判明するまでに、さして時間はかからなかった。

当たらないのだ。

アラガミがどんなに趣向を凝らした攻撃を仕掛けようと、彼女には決して当たらない。まず回避されるか、展開した装甲に防がれる。絶対に直撃はしない。

例えば死角から無音のうちに奇襲をかけようが同じこと。本能と呼ぶべきものが思考を無視して勝手に体を駆動させ、その場における最善手を自動的に選択し実行する。脊髄反射に近いであろうこの恩恵で、対処に失敗したことはいまだかつて一回もない。

相対するアラガミにとっては何もなかったものではないだろう。これも一つの理不尽の権化だ。

それでも入隊したての頃は膝が震えて同僚の死をみすみす許してしまったり、攻撃の挙動が荒つぽく、雑で無駄の多いものであったりと、つけこむべき隙が確かに随所に散見された。もしこの当時、ヴァジュラやボルグ・カムランなどに遭遇していたならば、さしもの彼女もただではすまなかつたろう。

が、休暇という概念を忘却したかのように毎日毎日ひっきりなしに出撃し、神機をふるい続けるうちに、それらの要素は影も形も無くなった。強張りは融け、あらゆる挙動が滑らかに、豊かな弾性を帯びだした。

——あんなオーバーワークでは遠からず潰れる。

囁かれるのもむべなるかな、一見命知らずの馬鹿そのものな行動だったが、しかし結果から観測すれば、身を危険に晒して命を大事にしたということになるだろう。命を大事にするといつても指先の怪我程度に一々死ぬような大騒ぎをするわけではない、むしろ死を避けるのに必須ならばどのような損害をも厭わないのが彼女という人間らしい。先人達が何年もかけてようやくと登りつめた場所。それを一足飛びに通り返し、いまや彼女は前人未到の極地に立ってなおも処女雪を踏み続けている。第一種接触禁忌種のアラガミを単独かつ無傷で撃破するなど、最早あらゆる意味で人間を超越しているだろう。

そして、そんな彼女だからこそ。

誰よりも死を忌避し、強迫観念じみた生存への渴望を力の根源とするこの怪物であればこそ。

フェンリル極東支部の長、ヨハネス・フォン・シツクザールが極秘裏に進めていた計画——「アーク計画」の全貌を知ったとき、大いに揺れ、惑い、狂おしく悩乱させられた。

※ ※ ※

「どうしたもんかのう」

フェンリル極東支部、通称「アナグラ」のエントランスに設置されたソファアーの上に身を投げ出して、彼女はぼつりと呟いた。

あてどもなく分散させていた視線。霞がかかったような目つきが、触媒を得て一気に定まる。

収束した視線の先には、同じく前途に迷うゴツドイーター、台場カノンの姿があつた。「カノン、カノンや」

間延びした声で呼びかける。猫に似ていた。ちよいちよいと、福でも招き寄せるみたいな、特徴的な例の手つきまでしてみせる。

「……………。あ、はい?」

数瞬、反応が遅かった。

答えの出ない思考迷路に——無限ループの悪弊に嵌り込みつつあったにしては、まず上等なほうである。

乾いた瞳を、ぱちぱちと、目蓋の裏で撫でさすり、カノンの意識は現実へと回帰した。「ちよいとここに同座して、話でもしていかなかえ。共に惑う者同士、胸襟を開き合うもよからう。さすればまた何がしか、新たな展望が開かれるやもしれんぞよ」

「私は——いえ、そうですね」

それじゃ、と断りを入れてカノンは行儀良く対面のソファアに腰掛ける。

「あなたも迷っているなんて、ちよつと意外でした」

「第一部隊の衆は皆、どちらであれ旗幟を鮮明にしておるからのう。頭であるはずのわしがこの様とは、情けないことこの上ないわな」

「いえ、そんなことは」

「よいよい、擁護など無用よ。射線上に味方がいようが遠慮なくぶち抜くお主にや似合わん」

「そ、それは言わないでくださいよう。私だっけいつもああじゃないんですから。ただ、その、いざトリガーをひく時になると……」

ごによごによと弁明を続けるカノンに、呵呵と笑って彼女は返す。しかしその実、内心彼女は他の誰より高くカノンを買っていた。

なぜならば、この台場カノンこそが天上天下に唯一人、彼女に対し直撃弾をぶち込んだ存在なのだから。

（あの衝撃、舍利になるまで忘れることなど出来まいよ）

彼女は己が超直感を自覚し、また頼りにもしていた。それが高じてこれさえあれば大丈夫、どんな戦場だろうとも無事に潜り抜けられる——と、野放図にもつけあがるほど。

ところがその日、自慢の玩具は何の役にも立たなかった。一切何をも感ぜられぬま、カノンの弾に撃ち抜かれたのだ。

たとえるならばある穏やかな昼下がり、野原を歩いていたら突然なんの前触れもなく足下が海に変わったような——まさしく晴天の霹靂としか言いようのない大異変。それに直面した彼女の心情はとても筆舌に尽くせない。肉体上の、若干吹き飛ばされる程度の衝撃など、精神に喰らったものに比すれば物の数ではなかったろう。

「射線上に入るなって、私言わなかったっけ？」

有無を言わせぬ、氷のような低い声。罪悪感など毫も含まず、邪魔なんだようろちよろするな目障りだとの不快の念が形をとったようだった。

彼女がカノンの渾名の一つ、「誤射姫」の意味を畏敬の念と共に——なんて、ちよつと

ずれた形で認識したのはこの時である。

当節彼女の心の中では種々の感情が入り混じり、わけの分からぬマーブル模様を描き出されていたのだが、その中で最大面積を誇る色は、あろうことか「感謝」であった。

己が増上慢、天狗の鼻つ柱をへし折ってくれたことに対する圧倒的感謝。もしあのままであったならいずれ頼みの綱の直感を自ら曇らせ、どこかのつまらぬ戦場で死骸を晒す末路であったと悟ったゆえに。

自分も所詮取るに足らない、油断すればあつけなく死んでしまふ存在なのだ。完全無欠の絶対者になど、どうあつてもなれないのだと。死に対する恐怖、その本質を思い出すことができたから。

彼女はカノンに対し、もういつそ抱き締めたくなるまでの感謝と敬意を覚えたのだ。

むろん、それを口に出したりはしていない。誤射してくれてありがとうなどと言う輩は誰が見たって気味が悪いし、下手をすれば気が狂ったとさえとられかねまい。

「——と、晴天の霹靂と申さばこれもじやな。まさか終末捕喰が単なる都市伝説にあらずして、真実起こり得るとは、の」

「ええ、本当にショックでした。今でこそちゃんと受け止められているけれど、最初はなんだか白昼夢を見ているような、目に薄い膜がかかったような、兎に角奇妙な感じで」アラガミ同士の共喰いの果て、その行き着く究極のところ。史上最大のアラガミ「ノ

「ヴァ」が誕生^{あらわ}れ、地球そのものを喰い尽くす——それが終末捕喰。巷間に溢れる「黙示の日」預言のひとつであった。

なんともスケールの大きな話だ。そのせいか、根っからこれを信じている者は極めて少ない。精々が集団自殺を呼びかけるカルト教団ぐらいだろうか。一般人には大抵、何を馬鹿なと鼻で笑い飛ばされている。が、しかし、

「支部長と榊博士……この二人が認めている以上、疑う余地は無しか」

就中、ペイラー・榊は過去にアラガミ防壁の基礎を設計したりした、アラガミ研究の第一人者だ。勲一等等と云っていい。そういう彼に反証を突き付けられるほど、彼女もカノンも学識豊かな頭脳ではない。

「にしても、どいつもこいつも対応が早いっつらないわなア。未だ決断を下せておらぬのは、ひよつとするとわしとお主だけやもしれんぞ」

「リツカさんも先日決めちゃいましたしね。乗らないって聞いた時、ああ、やつぱりなあつて思いましたよ」

「頑固一徹然としたところのある娘じゃからのう。ああした気骨の入っている、確たる自己を持つ者は見ていて清々しいわい」

「娘つて。あなた確か、リツカさんより三つか四つ下でしょう」

「なんじゃ今更、わしの言葉遣いは今に始まったことではなからう。第一それをいうな

らば、わしは同じく四つほど上のお主に向かい、こうしてオヌシ呼ばわりしとるわけじゃが、それはよいのか」

「う、そう言われてみれば……」

「ふむん、随分疲れておるのではないかや。現実の輪郭がぼんやりしておろう」

「疲れもしますよ、告白しちゃうとここ何日か碌に眠れてませんもの」

自嘲気味に唇を歪ませ、カノンは深々とため息をついた。

「私にはリツカさんみたいに沈みゆく船を猶も信じて、最期まで運命を共にするだけの度胸も矜持もない。自分が死ぬのも、近しい誰かが死ぬのも嫌なんです。考えただけでも怖くてたまらないですよ。でも、だからと言って世界中の人を見捨てて自分達だけのうのうと逃げ延びるなんて……きっと罪悪感と自己嫌悪がいつまでも離れない。べつたり背に張り付いて、いつの日かその重みに耐え切れなくなり潰されるのが目に見えるようです。結局どっちつかずの中途半端」

きつとそんな自分自身こそ本当に許せないのだろう。赤く充血した瞳が、それを何より雄弁に物語っていた。

終末捕喰は回避不可能。いずれ必ず来る運命と定義して、ならばせめてそのタイミン
グをコントロールしてしまえというのがシックザール支部長の計画だ。

発生のタイミングが制御可能であるならば、その間生かすべき生命を安全な場所——すなわち宇宙空間に逃がしておくのもまた可能。さながら大洪水を乗り切り種の保全を図る方舟、アーク計画の名に偽りなしというべきか。

補足すると、シックザールの説明するところでは、終末捕喰の先に待っているものは「生命のリセットされた新世界」との事である。何から何までかの伝説をなぞるようで、いつそ嫌味なものさえ匂い立つ。

問題は、人類総てが方舟に乗船できるわけではないこと。

その定員は実に千。アラビア数字で、1の隣に0みつつ。これを多いととるか少ないととるかは各々の価値観なりなんなりで意見が分かれるだろうから一概には言えないが、人類の総数から見てみれば、

「圧倒的に少ないな。人類総てどころか、この第八ハイヴから見ても一パーセントにすら満たん。雀の涙もいとところじゃ」

まさに命の選別、選民思想の極北。

「それでも零よりはまし、と考えてしまうのはあさましいことでしょうか」

「まさか、誰だっと思うさ。誤解を承知で言わせてもらえば、人間なんて放っておけばいつの間にやらばんばん増えてる生き物だからの」

万年発情期は伊達ではないわ、他の戒律はみーんな忘却したくせに、産めよ増やせよの一条だけは後生大事に遵守まもりくさって——と。

彼女は殊更に高く笑った。

「もつとも、アーク計画が発動しなければ必ずしも零になると決まったわけではない。終末捕食が事実だろうと、我々ゴッドイーターが事前にその芽を摘み取り続けなければいいだけの話」

「できるんでしょうか、そんなこと」

「紙のように薄いのが、まあ皆無ではなからう。可能性はあると見た。が、そんなちつぽけな光明に縋れる者が果たしてどれほどいることやら」

倍率で言えば百倍か千倍か、あるいは更に更にもその上か。

言うまでも無く馬鹿気た賭けだ。こんなものに全財産はおろか五臓六腑の悉くをつぎ込むだなんて、冗談にもならぬ狂気の沙汰に違いない。

「シツクザール支部長はそうではなかった。彼は賢明じゃよ、物事を高い視点からよく見ておる」

もし仮にアーク計画をぶっ潰し、人為的な終末捕食を喰い止められても、その先に自然の終末捕食が起きてしまつては何にもならない。人類が滅亡したその後で、ごめんなさい、失敗しちやつたやつぱり私が間違つていましたなどと詫びても遅いのだ。

「あなたはアーク計画を正しいと思ってるんですか？」

「筋は通っているし、何より堅固で確実な道だと思っておるよ。種の保全、人類の足跡を絶やさぬことを第一目標とするのなら文句の付け所がない。ああ、じゃがしかし、終末捕食を防ぎ続けられる可能性があるのなら例えどんなに低かろうとそれを追い続けるのが正道だろうと言えなくもないし」

お手上げだ、と言わんばかりに彼女は天井の照明を眺めた。

「駄目じゃな、堂々巡りになっておる。可能性の話をしだしたらきりがない。すまぬなカノン、新たな展望どころかこれでは余計に混乱させてしまったようじゃ」

「いえ、そんなことは。弱音を吐けたお陰で、ちよつと気も楽になりましたし」

「ひとつヴァジュラでも狩りにいかんか」

なにをとち狂ったのやら彼女は話を急転直下させ、カノンを呆然とさせた。

「こういう時は引き籠もつてうじうじ考えていてもよくないのよ。血が鬱ってきて逆効果を呈するわい。それよりアレじゃ、思い切り暴れて泥のような眠りに就いた後にこそ、知恵というやつは湧いてくる」

「な、なんでですかその体育会系みたいなノリ。大体私、こんな体調だからどんなハマをする」とやうに」

「なあに、心配無用。わしと共に出撃^でる以上、何があろうと絶対に死なせなどせんよ」

ともすれば大増上慢ととられかねない台詞であった。彼女もそれを理解しているから、常日頃なら絶対こんなことを口にしたりはしない。

にも拘らず現ににこうして言ってしまった。ということは、見えにくいだけでどうやら彼女の精神状態も大概並ではないようだ。

「ほれ、善は急げじゃ」

「あ、ちよ、待つてくださ——ひゃあん、何処触ってるんですか！」

半ば引きずつていくような強引ぶりで、彼女はカノンをミツシオンへと連れ出した。

※ ※ ※

結論から述べてしまうとミツシオン自体は成功。事前に言つた通り、彼女は自分はおろかカノンにさえも傷一つ負わせることなしに、ヴァジュラを滅殺してのけた。

が、アナグラに帰投した途端、宛然糸を切られた傀儡みたく、台場カノンは意識を喪失。鬱屈を晴らすかの如く、常時の倍近い苛烈さで目を爛々と輝かせながら戦つていた所為もあり、ついに疲労が限界を振り切つたのだろう。安らかな寝顔を浮かべていた。

「よっ、と」

そんなカノンをベッドに送り届けると、彼女もまた自室に戻り、布団の上にダイブす

る。

別に眠気は感じていない、それどころか今すぐにも再出撃が可能なまでの、力の漲りがわかる。

「血の巡りもようになった。思案を再開するとしようか」

さながら宣誓の如く呟いて、彼女は意識を自己の内海へと埋没させた。己が根幹を見つめ直し、最も納得できる答えを手にするために。

（わしにとつて絶対に譲れぬものとは何か）

愚問。命を存続させること、これ以外に何がある。

（然らば話は簡単じゃ、アーク計画に乗ればよい）

カノンの前では言わなかったが、現生人類の九割九分を見殺しにすることに対して、彼女の胸にはほんのわずかな痛痒も兆してなどいかなかった。

否、痛まない、どころの騒ぎでは済まぬ。

きつと快感があふれるだろう。

その光景に見えたならば、だ。

力は眩しい。

殺戮は愉しい。

罪とはなんと甘美な味か。

考えてもみるがいい。

ちよつと以前の彼女が仮に世界の破滅を願ったところで、それは所詮負け犬の自慰、仕事に行くのが厭だから職場に隕石が落ちないかなと祈念する、空虚な遊びそのものではないだろうか。

ところがいまや望みさえすれば本当に、天地狂乱の大厄災が発生するのである。

(わしもエラくなつたわい)

社会という、かつて自分を押し潰さんとのかかつた得体の知れぬ怪物を、いまや逆に組み敷いて首筋に刃を当てているのだ。

生かすも殺すも胸先三寸。

(垂涎、垂涎)

わが身の浮上を実感せねば嘘だろう。人類の運命を掌握するのは、彼女にとって重荷ではなく充足だった。蟲は、弱者は、他人どころか自分一個の運命すら、満足に操作できないのだから。

数知れぬ運命を弄べるということは、それだけ雄なる存在である証明だろう。選べるとは、なんたる贅沢であることか。彼女は心底幸福だった。

(とは、言い条——)

むろん彼女は己を包むエラさとやらが実は自分に由来せず、元を探れば結局は、シッ

クザールの余慶に過ぎぬと理解している。

(わしはただ、投げ渡される命に従い、わけもわからずがむしやらに、作事場で手足を舞わせておった一介の職人ではない。棟梁は、全体図を引いたのは、あるかどうかもわからぬゴールに鋼の意志で邁進したのは、ヨハネス・フォン・シックザール、彼のみよ)もつとも彼女の演じた「舞い」は、ふりつけひとつ、指一本の置きどころを違えただけで即座に首が飛ぶという、異常な難度のものであったが。

まあ、それはいい。

とまれ彼女は「理解^{わか}っている」と自身に言い聞かせることで、能の奥の熱っぽさ、うぬぼれの酔いを醒まそうとした。

決断は、シラフでするべきだろう。

憂慮すべき要因が、皆無というわけでもないのだ。

「ソーマ、サクヤ、アリサの三人。ネットワークはやはり、ここに収束するわけか」
気付けば口に出していた。

共に学び、共に笑い共に泣き、戦場から戦場へ、共に死線を駆け抜けた第一部隊の仲間たち。彼らはアーク計画に反対し、その意図を挫かんと画策する側にまわっていた。サクヤとアリサなど既に犯罪者としてフェンリルから追われる身空だ。

アーク計画に乗るといふのは、すなわちこの三者を切り捨てること。その決断ばかり

は流石に軽々に下すことはできない。見ず知らずの他人の命百万よりも、身近な一人の行く末こそを差し迫った問題として気にかける、ごくありきたりな精神機能がこの破綻者にも存在していた。

特にアリサ・イリーチナ・アミエーラとは肌を重ねて互いの心を伝え合った——何も間違つたことは言っていないはずである——仲なのだ。どうしてこれを素っ気もなしに切り捨てられよう。

「しかし、よしんば彼等に同調しても、今度はコウタの願いを砕く悲愴が待つておる」
第一部隊最後のひとり。彼女と日を同じくしてフェンリルへ入隊はいつた藤木コウタは、アーク計画の全貌を突き付けられるや間髪入れず、はつきり表明してのけている。自分はアーク計画に乗るんだ、と。

家族への愛に裏打ちされたその決意、よもや覆りなどすまい。

「まあ、やはり、な。誰もが等しく納得し、円満に迎える幕引きなんぞ夢物語じや。板挟みは避けられぬ。流血が不可避であるならば、わしが採るべきは、ふむ、いつそのこと……」

がちつ、と犬歯を噛み鳴らす。

しげんと頬が引き攣つて、猛獣の笑みが広がった。

「やるかア」

貪欲になれ、飛躍せよ——と、彼女は己を励ました。

「事ここに至れば是非もなし、ソーマ、サクヤ、アリサの三人、無理矢理にでも気絶させてふん縛り、方舟に放り込んでしまおうぞ」

それはまるで癩癩を起こした子供の発想。相手の思いも信念も一切斟酌してやらず、我儘を貫く以外のすべてを念頭から排除した、暴虐の発露に他ならなかった。

「失望されはするだろう。蛇蝎の如く憎まれもするに違いない。怨嗟の的になるであらうな。しかしそれでも、喪失よりはいい、喪失よりはッ。生き延びさえしたならば、遙かな未来で再び道が交わる卦として、極微なれども確かに残っているではないか」

「魂の死」には目をつぶる。

そのフリーズを、意志の力で思慮からむりやり締め出した。

どこまでも厚顔に、破廉恥に。彼女は己の粘着性を、ただひたすらに高め続ける。そうだ、諦めてなるものか。絆とは鎖の別名だ。ひとたび紡いでしまった以上、同胞はらからよ、断つは容易でないと知れ。

「さて、そうなると、ただ漫然と流れに身を任せているわけにもいかんな。わしが直接彼らと対峙し、叩きのめす必要がある」

果たしてそれができるかどうか。互いに勝手知ったる仲間が相手なのである、しかも最悪三対一。

どう考えても一筋縄ではいかないだろう。場合によつては手加減できず、殺してしまふ可能性とてなくもない。

「よしんばそうなつたとしても、わしのあずかり知らぬ所で死なれるよりかはずつとましじやて。最後の呼吸は、この手の中で。ぽつと出の馬の骨には渡さぬよ、例え神であらうとな。愛は独占を強いるもの、独占の極致は、ああ、畢竟『殺』の一字か。すべてを奪うということは、すべてを捧げることに通ずる。……捧げてやろう、受け止めたもれ、いいじやろう？ わしらは仲間であるゆえな」

腹は決まった。

決まつてしまつた。

感情面でも理屈の上でも、これこそ己が歩む道と太鼓判を押せる。

「いよし、わしは方舟に——」

乗る、と宣言しかけた寸前で。彼女の総身はだしぬけに、金縛りにでも遭つたが如く、引き攣りそのまま停止した。

「ぬ——くつ、は……あつ……」

唇が、舌が、声帯が麻痺して微動だにしない。さつきまであれほど流暢に、あられない謔言をべらべら喋っていたというのに、この急変はどうだろう。口から漏れるは掠れた喘ぎ声だけだ。

(な、何ぞ?)

ほどなくして気がついた。何かが彼女を止めている。

見えない腕で、肩をつかんで。よせ、よさんかこの救えぬ阿呆めが、ぬしの選択は間違いだぞと、空気を揺らさぬ叫喚を、力の限りぶつけているのだ。

(馬鹿な。理はある、この上なく精確に積み上げられた理があるというのに)

なら、その正体はさしずめ理外の理。第六感、本能に属するものであろう。有り体に言つてしまえば直感である。

いったいこれはどうしたことか。これまで彼女の生命を守るにあたつて最大の貢献をなし続けてきた直感が、生き永らえるための決断を阻んでいる。矛盾相克が起きているのだ。

もし仮に、直感こそを信じるのなら、この現象が意味するのは、つまり――

(見落としがあるということか? わしや榊博士はおろか、支部長ですら気付いていない致命的な陥穽が、アーク計画の横腹に)

そう考える以外になかろう。アーク計画など所詮は徒花、実の生らぬ花に過ぎないと。

脳ではなく、脊髄が叫喚して告げているのだ。

科学的根拠は何も無い。なんの論拠もなしに、ただなんとなく嫌な感じがするのでこ

れは欠陥品だと思えますなんてふざけているにも程があらう。仮に良識のある大人が聞けば失笑するか、さもなければ激怒するに違いない。

「馬鹿も休み休み言え。シツクザール支部長の下、最高峰の技術者たちが結集して築き上げたプロジェクトだぞ。一発で土崩瓦解に至る危険性を見逃すなどと、烏滸おこを抜かすのも大概にしろ」

とでも言つて。

良識と本能が激突し、がりがり互いを削り合う。そんな混沌そのものな彼女の脳内風景に、あるイメージが光輝を纏つて飛来した。

(……シオ)

どこか舌つ足らずな喋り方をする、天真爛漫な純白乙女。なんの因果か、ヒトのカタチを模したアラガミ。その肌のように純粹無垢な心の持ち主であるシオに、彼女も少なからずひきつけられた。

真つ白ということは、見方を変えればどんな色にでも染め上げられるということ。とくれば俄然、教育意欲が湧き上がってくるではないか。その点、シオは非常に呑み込みの早い、煎じ詰めれば「いい生徒」であつたゆえ、なおのこと教え甲斐があつた。

(幼児であつたわしを拾つた婆様も、あるいはこんな心境だつたのやも知れぬ)

シオの頭を撫でながら、そんな風に遠い日へ想いを馳せたりしたものだ。無垢な素材

を己好みに変えゆく悦——なるほどこれはたまらない。

だが、そのシオはもういない。シックザールの指示によって連れ去られ、今頃はもうコアを摘出されてしまった後だろう。

(あの男は躊躇などすまい)

何故ならシオこそアーク計画における最大最後の鍵だから。終末捕食の起点たるノヴァにあてがう核として、支部長様が血眼になり追い求めたものだから。

口惜しくは、あるけども。

仇を打ってやりたいとも、思うけど。

死者に拘泥するあまり命を喪失してしまうような行動が、彼女にはどうしてもできない。根本的にそんな形になっているのだ。

(……ん?)

と、ここで何がしかの引っかけかりを覚え、彼女は一旦この思考を中断させた。

(待て、待てよ。シオのコアがノヴァのコアに、という事は——そも、アラガミのコアとはぜんたいどのような代物じゃった?)

古びた記憶を掘り返し、コウタやアリサと共に受けた榊の講義へ立ち返る。

アラガミとはカツノオエボシの如き細胞の群体であり、消化器官等の臓器は存在しない。オラクル細胞自体が捕食を行うから不要なのだ。

このオラクル細胞群の指揮、統制を行いアラガミをアラガミたる形に保っているのがコアである。コアが残っている限り例え体を砕いても、いずれ再びそれをよすがにオラクル細胞が結集し、全く同一のアラガミが復活する。こういうあたり、コアこそアラガミの本体と換言してもいいだろう。

なればこそ、容易に引っこ抜かれないよう格納されてもいるのだが——いや、ちよつと待て。

本体？

意志の、心の、宿る場所？

「まさ、か——！」

天啓のように、彼女の中を一つの想念イメージが貫いた。

（いや、まさかそんな。いくらなんでもロマンティックに過ぎる。まるで前時代の餓鬼共が偏愛した御伽噺ではないか）

ところがどうしたことだろう、その御伽噺こそが真実に違いないと確信する己も確かに存在するのだ。

（この想像が正しければ、確かにアーク計画は失敗しよう。その気配が濃厚じゃ。博士や支部長が気付けぬのも道理、むしろ学問に秀でた者ほどこの陥穽には引つ掛かる）

最後と思っていた選択肢、だがその先にはもう一段、更なる選択が待ち構えていた。

流石にこれ以上はないだろう。これから下すものこそが、真に最終最後の決断。

現実的な土台のもと、營々と積み上げられた理を信ずるか。それとも直感以外に何も頼るところの無い、女子供の絵空事に飛びつくか。

「まあ、愚問よな。こんなのはもう、一六勝負ですらない。踏み外す余地なき鉄板よ、安気して乗らせてもらおうではないか——」

迷う事など欠片もないと、彼女は即決してみせた。

※ ※ ※

アーク計画遂行の地、エイジス島が崩壊し、月がかつての地球の麗姿を思わせる、色彩豊かな天体へと変貌したのは数日後のことである。

この結果から、彼女がどちらを選択したのか、答えはおのずと察せよう。

「かくて人は相も変わらさず穢れた大地にへばりつき、目には映れど届くことなきかの楽土へと胸を焦がし続けるか。それもよからう、悪くない。少なくとも、見えるようにはなったのじゃから。一步前進というものよ。こうして足掻き続けておれば、いつか真つ当な手段で以つて、なんら気兼ねする要もなくそこへ行ける日が来るやもしれぬ。いやさ、待ち遠しい限りじゃて」

彼女が歩みを止めることはない。誰よりも泥臭く、臆病で、そして真摯な生き方を、これからもずっとずっと続けるのだろう。

アラガミの屍骸で出来た山。月光を浴び、歪な影を、輪郭を、地に投射する頂上で、それを築いた咎人は、神を斬獲せし者は、静かな微笑を浮かべつつ、自慢の牙を愛撫した。

BURST編 Part 1

光が降っていた。

蛍火を思わせる淡やかな黄金色の輝きが、夜の空から深々と舞い落ちていた。

その正体は分からない。背後に控えるペイラー・榊の叡智なら、何がしかの考察を導き出せる——否、既に導いているやもしれないが。態々それを問いただし、開陳させてみようなど、無粋な真似をする者はこの場に一人もいなかった。

あまりに幻想的な光景を前にして、皆が皆、心打たれて慄えていたのだ。

フードを外したソーマがそつと手をかざし、すぐ鼻先を漂っていた光をつかまえ、きつく、きつく握り込む。そうすることで、いつてしまった少女の残影をより強く己の中に焼き付けようとするかのように。

が、すぐ隣で行われているこの動作に、彼女は少しも気付けなかった。

(美しい。——)

頭を占めるはその一念。単一の念のみが他の一切が立ち入る隙を潰しきるなど、生涯初のことである。祖母が死んだ時ですら、ほんの微量、芥子粒ほどではあるものの、冷

徹に己を客観視する余地を残していたというのに。

彼女自身どうしてこれほど心に響くか分からない、魂抜かれて連れ攫われたかの如き、説明不能な圧倒的感動。これはもう、忘我の境地と叫びたい。

ゆえに彼女は覚れない。自分が今していることが、一体どういう効果を生むのか。

常日頃の彼女なら、未知の事物と遭遇すれば、必ずそこに潜むであろう危険について考慮し備えてきたというのに。

愚かしくも最も必要とされたはずの瞬間に、ただこの一時いっときに限つてのみ、彼女はそれを怠った。

——この感動は、自分を殺す。

ここでそれに気付いておれば、あるいは先の展開は、もつと違った経路を辿っていただろう。

しかし現実にそうと知ったのはずっと後で、その時にはもう取り返しのつかないまでに崩壊が進んでしまっていた。

※ ※ ※

「なんと、わしの神機にガタが？」

アーク計画の後始末にも大方ケリをつけ終えて、安定した生活の戻ってきた矢先のことだ。

神機整備班所属、楠リツカその人より齎された報告に、彼女は両目を見開いた。

「うん、あちこちに不具合が出ているんだけど、装甲のジョイント部分が特にね」

差し当たつての応急処置はしておいたけど——と、眉間にぎゅつと皺を寄せつつ語を継ぐリツカ。

「近々本格的なメンテナンスをしなくちゃ駄目かもしれないから、留意しておいて」

「あい分かった、委細承知したとも。しかしなんじやな、神機とは存外脆いモノであるのかの。先代もおらぬわしの神機にこうまで早くガタが来るとは」

「何言つてるのさ、普通に使つていたなら短期間でこんな風にはならないよ」

じろつと、なじるような眼光が彼女の鼻梁を睨め上げた。

「わしの使い方に問題があるか？」

「それ以外に考えようがないね。ほぼ同期のアリサやコウタには起こつていない現象だし、はつきり言つて酷使のしすぎだよ、君」

そうなのである。もうベテランと呼ばれるようになって久しいというのに、彼女は未だ新人時代と変わらないオーバーワークっぷりを披露し続けているのだ。

極東支部の休暇取らず、と一部で噂になりさえしたらしい。多いときなど一日に五回

も六回も出撃したと、データバンクに刻まれている。

その上彼女が愛用している神機形態は「剣」なのだ。あらん限りの膂力で以って、アラガミに直接打ち込んでゆく。こんな持ち主にかかつては、神機の方もたままるまい。いくら丈夫に出来ていようと、悲鳴を上げるのは必然だろう。

「ツバキさんが書類片手に呻ってたよ、あの馬鹿どれだけ有休貯めれば気が済むんだ、利子でも期待してるのか、そのうち殴り倒してふん縛ってでも休ませてやる——って」

「おお、おそろしいおそろしい。怠慢ではなく勤労を注意されようとは、なんとも面妖な話よなあ」

こんな彼女を指して、

「あいつは暴れ回るのが好きなんだ。戦闘中毒者バトルジャンキーつてやつさ」

とか、

「極度のサディストなのよ。アラガミの血飛沫や断末魔に興奮して体を火照らせるって聞いたわ」

などとまことしやかに嘯く手合いもちらほら居るが、勘違いも甚だしい。

彼女はただ、己の勘と技量とが、錆び鈍るのを恐れているだけなのである。

如何に優れたピアニストでも一日弾かねば自分が気付く、二日弾かねば周囲が気付く、三日弾かねば客が気付く。それと同様に戦いくさの腕も、怠けていればどんどん落ちてい

くのでは——と、彼女は本気で不安であった。

ましてや相手は誰あろう、一秒たりとも休むことなく知識を貪り高みを目指し、変質に変質を繰り返し、より無慈悲な属性を、より強^{したた}かな特徴を発現させては止まらない、アラガミという超生命体ではないか。

(もたもたしておれば、一気に置いていかれる)

危機感に衝き動かされて当然だ、と彼女は言うに違いない。彼奴^{きゃつ}らを絶滅させない限り、真の安息はないのだと。

「どんなにいい薬でも摂り過ぎれば毒になる。たまにはいつそ敢えて毒を飲むのが大切」
「や」

そんな内心を知ってか知らずか、リツカはにべもなく言いきった。

「そんなもんかのう」

「そんなもん。とにかく、自分の神機がいつ爆発するか分からない爆弾を抱えた状態ってことは忘れないで。もしちよつとでも違和感を覚えたら、すぐに撤退するんだよ」

「了解。しかし、くく、その言い方。まるで母が子に下知するかのようじゃなあ」

「ん、まあ、これでもそこそこ神機と付き合ってきたからね。自然とそういう気分にもなるし、それを引きずることだってあるんじゃないかな」

(うむ、やはりいい女じゃなあこやつ)

変に照れを差し挟まないさばさばした風采は、彼女の大いに好みとするところであった。

そして、ああ、やんぬるかな。リツカの忠告は虚しくなった。これよりほんの数日後、最悪のタイミングで抱えた地雷は作動した。

※ ※ ※

その日、彼女は新種のアラガミ・「ハンニバル」の討伐任務を受諾して、嘆きの平原へ繰り出していった。

統率するは、もちろん第一部隊の仲間たち。

ハンニバルに関して事前には様々な噂を耳に入れたが、なにぶん新種なだけあって、断定できる要素は少ない。ただ、桁違いの戦闘力と生命力とを兼ね備えた強敵という一点だけは、ほぼほぼ間違いなさそうだ。

「大丈夫、このメンバーならどんなのが来たって負けやしないさ」

と、いつも通りの陽気さのまま藤木コウタが放言し、

「油断は禁物ですよ、まったく」

それを諫めるアリサの声も、心なしかやわらかい。少なからず彼の意見に同調すると

ころがあつたのだろう。

「……………」

ソーマが無言なのは毎度毎度のことである。

が、今日に限ってはもうひとり、

「……………」

どうしたことやら彼女までもが口を噤んで黙然と脚を動かしていた。

「リーダー?」

その態度に不審を抱いたアリサが、そつと彼女に呼びかける。

「——。ん、ああ。どうかしたかの、アリサ」

「それはこちらのセリフですよ。心ここにあらずつて風でしたけど、どうかしましたか」

「ちくと考え事をおつた。思えば長い付き合いになるといふのに、こやつへの気遣

いが欠けていたとな」

こつ、こつと神機を叩きながら言う。事情を知るアリサはそれだけで、ああ、と合点した表情になった。

(とつきについたにしては上出来だったのう)

ところがどっこい、口に出したのは真つ赤な嘘。真実はまるで別にある。

(——おる。まいったな、よもやこれはどまでとはの。正味、思いもせなんだぞ。過去に

打破した如何な怪物連よりも、劍呑かつ凶悪な輩がこの先に待ち構えておるわ)

彼女は緊張していたのだ。研ぎ澄まされた直感の為す業なのか、まだ姿を見せてもいない敵手の気配を察知して。

直接対峙していないにも拘わらず、肌が粟立ち鼓動が早まる。まるで新兵の頃、初めてヴァジュラと相對したときの焼き直しだ。

「リツカさんにも言われたでしょうけど、違和感を覚えたらすぐに退いてくださいね。神機の代わりはあつてもあなたの代わりはいないんですから」

「嬉しい事を言ってくれる。然らば頼りにさせてもらおうか、お主らが気張ってくれればわしの出番も少のうて済むというもの」

「ふん」

「任せてよりリーダー、上達した俺の腕前、見せてやるつて」

硬くなり過ぎず、さりとして気抜けしたというわけでもなく。丁度いい具合に気力が充実したのを感じ、彼女もまた丹田に力を意識する。

(おそらく、そう易々とはいかんじゃろうが)

それを口に出すことはしなかった。部隊の頭の恐れというものは、単に一個人の感情ではない。

それは付き従う者すべての心に滲み渡り、士気を著しく損なう結果に波及する。自意

識過剰ではない。これは物理的必然だ。規模の大小に拘らず、集団の大将たる者は常に泰然自若と構えておらねばならぬのだ。

「ほほう——」

と、そう自認していた彼女であったが、いざ討ち果たすべき大敵を目にした瞬間、不覚にも感嘆の吐息が漏れるのをどうしようもなかった。

通常、アラガミというものは何かしら既存の生物を思わせる造形をとるものだ。ヴァージュラならば猫科、ボルグ・カムランならば蠍、シユウならば鳥、といった具合に。

しかし、このハンニバルは違う。
懸絶している。

形の上でも全く新たな生物としての地平を切り拓いており、しかのみならず精緻さは、完成度たるやどうだろう。

造形上なんの欠点も見受けられない。頭のとっぺんから尾の尖端まで、何処をとつても虐と破壊を押しつけるため、最適化されきつている。必ず殺す——必殺の意志を物質に具現させたなら、たぶんこんなのに結実するのだからか。

自然というより、いつそもう、銃器や刀剣——戦うための人工物がときに発する美々しさを、このアラガミは確かに身に着けていた。

これが真龍、ハンニバル。紛れもなく今現在の、全アラガミの頂点に君臨する個体。

(二十年か三十年ぼっちでよくもまあ、かくも苛烈な進化を遂げたものよのう)

つくづくふざけた成長速度に辟易せずにはいられない。

天をも揺るがす咆哮が轟き——かくて闘争の火蓋は切られた。

「ほれ、いつまで寝ておる、早う起きんか。格好いいところを見せてくれるのではなかったのかえ」

「うう、ごめんリーダー、助かった」

歴戦の古強者たる第一部隊の面々が、リンクエイド蘇生措置を多用せねばならなくなるまで追い込まれている。これはなにも、毒だのなんだの、ハンニバルが特別変わった性質を備えていた所為でない。

「ぐっ……いー」

尾による薙ぎ払いを装甲で防御うけしたソーマの身体が、寸前バックステップで射程外に逃れていた彼女より、更に後ろへ素っ飛んでゆく。速度、威力、範囲。どれをとつてもボルグ・カムランのそれを大きく上回る一撃であった。

「まったく、怪物じゃな」

おちおちばやいてもいられない。

彼我の間合いが瞬息裡で詰められる。

見上げるような巨体であるのに、この素早さはどうだろう。めったやたらに攪拌される大気の悲鳴が聴こえるようだ。間髪入れず振り下ろされた拳撃を、半身になって再びかわす。ものすごい音を響かせて大地が陥没、蜘蛛の巣状に亀裂が走る光景を、彼女は間近で見せつけられる運びとなった。

（加減しろ莫迦。強すぎるぞ、なあ、お主）

そう、このアラガミは純粹に強い。

攻撃手段は拳打に炎に尾っぽにと、今まで出会ったアラガミ共と似通ったものばかりだが、すべての威力が単純に凶抜けきっているのだ。

小細工など要らぬ、絶対的な力を以って押し通るのみというのは大抵のアラガミに共通した特徴だが、こいつほどそれが顕著な奴はいまい。両の手に握られた獄炎の剣、あれを振り回すだけでほとんどのアラガミもゴッドイーターも死ぬだろう。

なるほどこんな化け物が相手では、如何に精強を誇る第一部隊をもつても苦戦するのは道理だ。

「つ、馬鹿力め。あまり装甲に負担をかけたくないんじやがな」

が、そんな修羅場の渦中でも、彼女だけは相も変わらず毫もぶれない。

流石にハンニバルの猛攻ともなるとかわしきるのは至難らしく、装甲を多用させられてはいるものの、直撃打を浴びざる事実に変化なし。

個々の命など水面に浮んだ泡も同然、些細な刺激一発でパチンと容易く弾けてしまふ、他愛のないものである。——そんな錯覚を惹き起こさせる悪夢のような戦場で、こゝも揺るぎないものがあるのは無条件で頼もしい。大丈夫、まだ大丈夫、きつとやれるはずだと見る者たちに安堵と力を与えてくれる。

この点から窺うに、なるほど確かに彼女には、一隊を率いる頭として相応しい資質があつたらう。

先代支部長の含むところありきな人事だつたとはいへ、選択自体に誤りはなかつたという事か。

「渡します、決めてください！」

「おお、任せえ。みなぎるわい！」

ゆえにこの結末はある種必然、「お約束」に近いモノ。彼女が健在である限り、第一部隊の敗北など金輪際あり得ないのだ。

リンクバーストにより極限まで高められた身体能力。それを以つて、剣形態の神機をハンニバルの胸に突き立てる。深く深く、柄まで埋もれと言わんばかりに、執拗に。

さんざん削られた挙句、こんなものを喰らつてはたまらない。さしもの究極生物も断末魔の絶叫を上げ、その身を地面に叩きつける以外なかつた。

誰が見ても分かる、死闘はこれで決着したと。

だいぶ梃子摺ったとはいえ誰一人欠けることなく任務を遂行できたのだ、大成功に違いない。

そう、そのはずだし仲間達も同様に考えている証拠に、安堵の吐息をつきながら倒した獲物に群がっている。あの用心深いソーマまでもが、だ。どう勘繰っても不安要素など見出せっこないのだが……。

(なんじゃ、これは?)

ほんの僅か、一抹の不安がこびりついて離れない。じくじくと、疼痛を生産し続けている。まるで魚の小骨が喉に引っかかったかのようだ。

傷自体は他愛もないが、齧される鬱陶しさはどうだろう。小指の先にも足らぬ異物にまんまと全身・全神経を掌握される、そんな忌々しさである。

「……レアものだな」

疑念に身をこわばらせ、突っ立っている彼女に代わり、コアを抽出したソーマが言う。コウタなどはその隣で、興味深げに神機の手でハンニバルの死骸を突っついていた。

「いやー、強敵だったねえ。でもまあ、初めての相手にしちゃ上出来でしょ」

「お主ア餓鬼か」

「余計なことしてないで、さっさと帰還しますよ」

「同感だ……」

「ひどっ！」

と、露骨に傷ついたりアクションをかますコウタ。

「最後まで気を抜くでないぞ、予期せぬ奇襲があるやもしれんからの」

彼女は「予感」をその程度と見積もった。どこか死角から、弛緩した空気を狙いすまして木っ端アラガミが仕掛けて来るのではないかと。

つまり彼女の想像力もその程度が関の山であったのだ。せつかく類稀なる超直感を備えていながら、十全に活かしきれなんだ。

その代償の支払いは、即時即刻やってきた。

「ちよつと待つてよー、せつかくの新種なんだしさー……」

むくれたようにぶつぶつこぼすコウタの声を背中を受けて、一歩踏み出した途端。

彼女の中の不吉な予感が、その体積を数百倍まで膨張させた。

もはや爆発といつていい。

「——！」

あまりのことに思考が凍る。裏腹に、体の方は例によって例の如く勝手に駆動し始めていた。

ぐるりと踵を返した先で飛び込んできた光景は、確かに息の根を止めたはずのハンニバルが、燃え盛る火柱の中から憤怒の瞳でこちらを見据えているという、摂理に背いたあり得ぬ事態。

「——!? コウタ、後ろ！」

一拍遅れて気付いたアリサが、悲鳴染みた叫びを上げる。

「何?！」

珍しいことに、ソーママまでもが驚愕に声を上擦らせている。その時にはもう、彼女の五体は次の動作へ移行していた。

これからである。

これからこそが問題なのだ。この場に於ける真の異常は、ここから始まると断言して構わない。死体が動き出す以上におかしなことが、ここからこそ開始するのだ。

景色が背後へ、帯となつて流れゆく。急加速による一種錯覚を感知して、彼女は自分の脊髄が、何をしようとしているのかを理解した。

(なるほど、割り込もうというんじゃない)

実際問題、そうする他にないだろう。

コウタは事態の急転回に追隨できず、身を竦ませて叫ぶばかりの有り様だ。

端的に、格好の的でしかない。既にハンニバルは発射態勢を整えている。固めた拳をふりかぶったその姿、まるで引き絞られた弓である。この段階に至っては、手持ちの如何なる攻撃手段を用いても、ヤツの動作を阻むことは不可能だ。悲しいかな、どうしようもなく火力が足らぬ。下らぬ小細工、猪口才など一顧だにせず切つて捨てられ、遅疑も容赦も無縁のままに破壊鎚は振り下ろさる。コウタは骨と肉とが混ざり合つたよく分からない赤黒い、煎餅状の物体と化す。

かと言つて、首根つこをひつつかんで退避するのもまた悪手。彼女ひとりならば兎も角、コウタの面倒まで見るとあつては遅きに過ぎよう。ハンニバルからすれば、虫がちよつと位置を変えた程度の差異にしかならぬ。結果として、赤黒い物体の体積が倍になるだけのことである。

これでは何かなにやら分からない。まるで死ぬために飛び出してきたようなものだ。となると、とるべき行動は自ずと限られてくる。コウタとハンニバルの間に割り込み、装甲展開、一撃を代わりに受けて防御する——この一択に。

(じゃが、間に合うか?)

ふつと脳裏に浮かんだ弱気な思考を、すぐさま乱雑に振り払う。

(間に合うか、ではない。何としてでも間に合わせねばならぬ)

勇ましい台詞だ。こんなこと、普段の彼女であったなら、決して夢にも思うまい。

この一事をとつてみても、彼女の精神に何か容易ならぬ変調が起きていると察し得る。

第一、彼女がいつも通りの彼女だったとするならば、そも走り出すわけがないではないか。始まりからして狂っている。そのせいで、後に付随する諸々までもが逐一おかしなことになっているのだ。

いや、彼女とて成算を度外視して身命を賭した行動に出ることはある。しかしそれはあくまで自分のため、そうしなくては未来がない、生きるための必須条件とそろばん玉が示したゆえの、己むを得ざる行動である。

反対に、他者を救うためだけに、一切合財総てを賭けて暴発するなど天地がひっくり返つてもあり得ないのが彼女という人間だ。

他者に回すのはあくまで余力、己が力は己のためにこそ使う。それが道理だ、道理であると弁えきつて、一ミリたりとも範囲外に踏み出さぬ。そういう精神性である。

大体、他者を救うと、言葉自体の間こえはいいが、それにはまず自分の足場がしっかりと確保されておらねば話にならぬではないか。満足な支えもなきままに溺れる者に手を伸ばしても、結局体重をもつていかれて諸共に死ぬが関の山。名状しがたく阿呆あほうらしき死に様だ。

それしきのこと、彼女ともあろう人物がわかつていないはずがない。はずなのに、いま対極に位置するはずの行為に打って出、しかも何の疑念も抱いていない。

外れている。いや、崩壊していると言った方が近いのか。
血が流れている。

彼女を織り成す、かけがえのない液体が。

もうすぐ致死量に達するだろう。にも拘らず、本人は何故か気付かない。

傷などないと思っているから、手当てを施すこともできない。すべての自覚を欠いたまま、泥を跳ね上げ、彼女は一気にジャンプした。

果たして狙い過たず目的の場所へ着地したのと、ハンニバルが暴力を開放したのはほぼ同時。が、それでも彼女は、

(間に合う)

と確信していた。理由は、本日彼女が装備してきた装甲の種類にある。

(三種中、最も展開に要する時間が短うて済むバックラーを選んだのが思いもよらぬ幸運じゃったな)

そのぶん防御面積は少ないのだが、そこは技量でカバーするという寸法だ。

間一髪、展開し終えた装甲に阻まれハンニバルの奇襲は徒労に終わる――

「――っ！」

はず、だった。

インパクトの瞬間、かつて味わったことのない、寒気を伴う猛悪な感触に息を呑むがきん。

破滅の音は思ったよりあつけなく。

ついに疲労が限度を超えて、振じ切られるジョイント部分。途端に支えを失う装甲。防禦姿勢がまるで無意味に。DNAが縮みあがった。総毛だつとはこのことだ。産毛一本に至るまで、ぴんと上向くのがわかる。

来る。

運動エネルギーの塊が。

一直線に打ちつけて――。

「あ」

続く言葉は、耳を聳する轟音の中に掻き消えた。

めぐしやあ、としか形容できない異様な響きが木霊して、彼女の身体は宙を舞う。

興味を失くした子供によって放り棄てられる人形の如し。地に落ちるや勢いよくパウンドし、二度三度、同様の動きを繰り返す。

それでも止まらない。

ずぎざぎざ、と、そのまま地面を滑り続ける。

「リーダー……」

アリサが悲痛な叫びを上げた。

返事はない。

指一本、ぴくりとも反応しないのだ。

どう考えてもまずい状態、まったく受け身を取らなかつたことといい、明らかに意識を喪失している。破損がコアまで達した際に神機が放つた毒々しい閃光、波紋も、果たして見ていたのか、どうか。ああ、本当になんということだ。

「どういふことだ……コアは確かに摘出したはずだ」

不可解であった。

コアを抜かれたアラガミはそれでお終い。甦りの目など完全に潰され、やがて崩れ去るのを待つばかりとなるはずである。

この原則からはどんなアラガミも逃れられない。あのシオですらそこは同様だったのだ。

ところが眼前のアラガミ、ハンニバルときたらどうだろう、そんな条理をせせら笑うかのようにこうして健在ではないか。

従来の常識、対策の基盤そのものが根底から覆された。圧倒的な暴威に加えて不死性など冗談ではない。悪夢そのものの現実だった。

「考えるのは後にしましょう。コウタ、リーダーのフォロー……いえ、やはり私がフォローに回るので、援護お願いします」

途中で言葉を変えたのは、自分の方がむしろ彼女の近くにいることと、曲がりなりにリーダーがうら若き乙女と呼ばれる存在であると思いついたからである。

鉄火場で何を阿呆なことを抜かしてやがると思われるやもしれないが、想定外の事態が立て続けに起こってアリサも動転していたのだ、仕方あるまい。

駆け寄ると、ぐつたり垂れた腕をとり、自分の肩に回させて、彼女の体を持ち上げる。

(えっ、軽、うそ、なに——?)

なんだこれは。

重量感がなさすぎる。

あまりにも楽々と担げてしまい、アリサは却って倉皇とした。だしぬけに頬衝を張られたような、意味不明という顔になる。馬鹿なはなしたが、これは何かの間違いだとさえ疑った。

これが、こんなものがどんなに押ししてもびくともしない、彼女がおらねば現場が回らぬとまで言われた、極東支部の大柱石たる女丈夫の器なのか。

話が違うぞ、小さすぎるし軽すぎる。これではまるで、どこにでもいる年端もいかない少女のものではないか——。

(あれ、そういえばリーダー、私よりも年下だったような)

老練な雰囲気と特異な口調の組み合わせによりほとんどのが忘れていたが、実のところ現在の極東支部最年少ゴッドリーダーは彼女こそであったのだ。二位との間は半年程度の僅差であるが、事実自体は変わらない。

そのことを、ようやくとアリサは本当の意味で知ったのだ。

「全員撤退だ、急ぐぞ！」

焦りの滲むソーマの声に、はっと我を取り戻す。

そうだ、グズグズしている暇はない。ハンニバルは復活し、いつその戦意を滾らせて、烈しくこちらを睨めつけている。負傷者あり統制乱れた現況から、アレともう一戦交えようなど無謀の極み。

闘いの流れは去ったのだ。

もはや明らかに撤退の時。

——かくして精銳、第一部隊は呪詛に塗れた暴君の咆哮を背に浴びながら、久方振りの苦い遁走を味わった。

※ ※ ※

彼女が目を覚ましたとき、周囲の様子は一変していた。

「……ぬ、む」

身を動かすと、肩から胸のあたりにかけてずきんと鈍い痛みが走る。

微かに鼻をつく消毒液の香りと、自分の部屋とどっこいな殺風景さが、今いる場所は医務室なりと教えてくれた。

（そうか、撤退したんじゃないな）

手早く現状を認識しながら、痛みをこらえて上体を起こす。

「あ、よかった。目が覚めたんですね」

その挙動にすぐそばの椅子に座っていたアリサと、

「……ん、フン。生きてたか」

反対側のベッドのふちに、腕を組んで腰掛けていたソーマが反応する。

「うむ、手間をかけたの。……こやつも健常そうだなによりじゃ」

と、彼女のベッドに突っ伏していびきをかくコウタへ視線を落とし、苦笑する。

身を挺してまで守った相手が甲斐なく死んでいたとあつては、なるほど確かに傷の負い損、なにがなんだかさっぱり分からぬではないか。

「おい」

そんな彼女に対し、若干眼光鋭くしながらソーマは言った。

「部下のために体を張るのはいいが、前の隊長の二の舞だけはやめろよ」

それだけ言うのと、もう要件は済んだとばかりに去ってゆく。大分ましになったとはいえ、人付き合いが下手なのは相変わらずのようだ。

（わしらはいいが、不快に思う者も多かるう。まあ、だからと言って愛嬌振り撒くソーマというのも、不気味なことこの上ないが）

想像してみて、あまりの違和感にぞつとした。人というものはそう易々と変われるものではないし、変わってくれても色々困る。

周囲の者はあまりの差異に、誰か別の人間がそいつの皮を被っているとしか思わないだろう。

（……………ん？）

なんだろうか、浮かべて三秒で忘れてもおかしくない他愛ない思考の断片が、しかし妙に引っかかる。

まるでお前がそれを言うのか、天に向かって唾するようなものではないかと笑われている気がして……

「本当に、無事でよかった……。あ、ちよつと待ってくださいね」

奇妙な感覚が明瞭な像を結びかけた、すんでのところ。横合いからかけられたアリスの声に彼女の意識はつい向かう。

慌てて戻したときには遅く、雲散霧消しきって何を考えていたのかすら思い出せなくなっていた。

(ま、大したことではなからう)

気持ち切り換え、アリサに頭を叩かれて夢から醒めたコウタと二言三言ことばを交わす。

「ごめんな、俺の不注意のせいだ。神機、壊れちゃったんだろ？」

「ああ、やはりいつてしまっておったか。容態はどうなんじゃ、再起は可能か？」

「ええ、直ることは直るんですけど、コアの制御機能にまで破損が生じたから暫く時間がかかるって……」

「それは重畳。いや、本当に何よりだとも」

いくら時間がかかろうとも、再び己の手の内へ納まってくればそれでいい。最悪の事態にまでは至らず済んだ、それだけでもう十二分にめでたかりしことである、と、あつけらかんと言ひ放つ。

むろん、彼女お得意の自己暗示だ。いったい何度こうして負の方向へ流れそうになる思考を矯正したか知れない。

「だから、なあ。そんなに悲愴な顔をするなよコウタ、男が廃るぞ。加えて言うなら、仮にも男子たる者が、ああも簡単に頭を下げちゃならん。もつとその重みを自覚しろ」

彼女にしてみれば、男ならばこうした場合はただ一言、

——借りができたな。

とでも言い捨てておけばよいのである。謝辞など述べたところで何になる、それよか黙って背中では語れ。

不言実行、それこそ男のあるべき姿であろうがよ、というこの価値観。

古い。

と言う以外にない。

古い人間に育てられた影響なのか、一世紀近くも前の化石を臆面もなく引つ張り出してる。もし口外したらば、アリサあたりが即座に、

「それはない」

と処断することであろう。

埃を被ってかびくさく、最早ほとんどの顧客から見向きもされてないそれを、彼女だけが至高の輝きと信じ抜いて憚らぬ。

現実家に見えて、変なところでお花畑だ。

「リーダー……うん、分かったよ。あ、じゃさ、今度バガラリー全巻持つてくるよ。それくらいの詫びはさせてくれるよね」

案の定、コウタは彼女の真意をやや曲解して受け止めた。

とはいえ、沈みがちだった雰囲気解消するという大元の目的は果たせたのだから彼女の中に不満はない。

「個人的には美味いめしでも奢ってもらった方が嬉しいんじゃないの」
放送による招集がかかるまで、しばし雑談に興じる三人であった。

※ ※ ※

「それじゃ、私達はもう行きますね。くれぐれもじつとしていてくださいよ」

「そうそう、たまにはリーダーもゆっくり骨休めするべきだつて」

「分かっておるさ、どだい今のわしにできることなぞありやせんからの。久方ぶりの休暇、存分に堪能する所存じゃ。お主らこそ、油断せずしっかり励んでくるんじゃないぞ」

と、この時は大して気にすることなく対応したものの、数日明けて退院してみると、会う者会う者皆が口を揃えて同じことを言ってくるので、さしもの彼女も閉口した。

(いったいわしを何だと思つとるんじゃない、鉄砲玉かロケット火花か)

放つておけば何処かへ吹っ飛んでいってしまいそうな危うさが、彼女にはあると思われてるらしい。

「ん、お前か。どうしたこんな所で、神機を使えん今の貴様にできることは何も無いぞ」

「貴女にまで仰られるとは、教官殿」

いい加減げんなりした、と言わんばかりの表情だった。背景を知らないツバキには、むろん何のことやら分からない。

「ああ、そういうことか。どうやら随分と説教された後のようだな」

が、しかしそこは雨宮ツバキ。彼女の表情からおおまかなことは察したようだ。

「ええ、事務員を始めとして整備班に至り、果ては清掃の女性にまで。大人しくひっこんでおれと、そうした意味のあれこれを」

「普段の行いの結果だ、甘んじて受け入れろよ」

「これはまた手厳しい」

妙ちくりんな言葉遣いに変わりはないが、彼女が現在喋っているのは明らかに敬語に含まれる。

彼女は決して無頼漢ではない、目上の者にはそれに相応しい態度で接せる。むしろそういう節義には常人よりも厳格な点、ツバキは彼女を気に入っていた。

「で、こんな場所で何をやっているんだ？　せつかくの休暇に来る所ではないだろう」
アナグラのエントランスである。

一応ソファアや何やらが設置されているが、基本的にはミッシヨンの受注ないし出撃準備をする場所だ。仕事から解き放たれた者がくつろぐには適すまい。

「こう、いざ休暇になってみると、何をしたものやらと途方に暮れてしましまして」
年頃の少女が口にするべき言葉ではない。

「お前……」

哀れなものを見る目であった。

鬼教官と聞こえ高いツバキがこんな目をするなど、尋常一様なことではない。

「無趣味な奴とは思っていたが、まさかここまでだったとは」

「耳が痛い。そこで所在なくアナグラの中をうろついていたと、斯様な次第で。——にしても、今日どうしたことか、やけに人が少ないですな。ゴツドイーターに至っては未だ一人も見えていない」

「それはそうだ、現在極東支部の総力を挙げてハンニバル捕喰作戦を遂行中だからな」

「ほう、それは——随分とあやつを重く見ておられるようだ」

「当然だろう、原理の究明、有効対策、なにひとつとして進まぬうちに、奴の特性が他のアラガミへと伝播してみる。我々はたちまち窮地に追い込まれる」

ゆえに急務だ、とツバキは語る。

なるほどそんなことが万一にでも具体化すれば、天秤は大きく傾こう。長きに亘った生存競争にケリが着く恐れもほの見えて来る。むろん人類にとって好ましくぬ形で、だ。

（アナグラを空にするリスクを冒す価値はある、ということか）

と、彼女は内心合点する。

（これでアナグラが奇襲されでもしたら、そりやもう笑い話じやろ。タイミング悪いっ
たらないわ）

アラガミにスパイという発想はない。内部事情を探る術など持たないし、そも必要性
の段階からして理解できまい。

自身の都合をただひたすらに押しつける、それしか頭がない連中だ。こつちが厳戒態
勢だろうが、バカンス気分で浮かれていようが、来るときは来るし来なければ来ない。
そういうものだ。

だというのにこの機会、夢かと思紛う絶好の隙を逃さず奇襲し得たなら、それは計算
でも直感でもなく、偏に運によるものだ。

彼女が笑い話と見なすのも致し方なからう、そんな悪魔染みた偶然は滅多に起こるも
のでない。

「得心いたした。しかし、そうするとどうしたものかな」

彼女は再び余暇をどう消費すればいいのやら、首を傾げねばならなくなった。

「嘆かわしい。お前くらいと少しの年齢なら普通、服に化粧にと色々興味が盛んだらうに」

「アリサがそのあたり典型的ですな。あの娘の部屋、ご覧になられたことがおありか」

「一度な。ひどいものだったが、まさか未だにあのままなのか」

「それはもう。服など必要最低限でよかろうに、と口を滑らせたところ、もの凄い剣幕で詰め寄られ、ご高説を賜り申した」

二人の部屋はある意味に於いて好対照といつていい。

アリスの部屋はそこいらじゆう一面に服やらアクセサリーやら化粧品やらが散乱し、正味足の踏み場にも難渋する始末であつて、整いきつた外見からはちよつと想像が及ばない、カオスな惨状を呈しているが。

反対に、彼女の部屋には何も無い。

今日から誰か別のやつと部屋を変われと言われても、五分で用意を終わらせかねない、ルームメイク完了直後の簡易宿泊施設の如き清潔性を保っているのだ。

これは何も彼女が几帳面な性格だから、ではなく、単に散らかすほどの私物が無いことに起因している。

服はフェンリル入隊時に支給されたのを未だに着まわして使っているし、寝る時は大抵下着一丁だからパジャマも要らない。

その下着も、彼女らしくなんの飾りもデザイン性も伴っていない簡素なものだ。上に至つてはサラシで済ませている始末。

こんなざまだから、化粧など産まれてこのかた一度もやったことがない。肌の手入れ

も同様だ、精々身売りの直前に、ちびたレモンせっけんで顔を洗った程度である。

(女として終わっているのではないか)

ツバキもそうしたことにはあまり気を遣わない人種だが、それにしてもここまで極まっではない。

「もう少し自分の容姿を保つ努力をしろよ、若い内はよくとも後々臍を噛む破目に陥るぞ」

「人の価値は顔などで決まるものではありませんまい」

「お前らしくもない台詞だな、それは理想論というものだ。残念なことに、六・七割は見た目によって、それも第一印象で決められるのが現実だ」

「世知辛い話ですなあ。クリームとか化粧水とか、あの手のものが肌につくところ、理屈抜きの不快感にぞっとせやませぬか」

「我慢しろ、腕輪装着の時を思えば楽なものだろう。それにこれでも大分ましになったのだぞ。一昔前には人は人を見た目が九割などと、ふざけた標語が平然と罷り通っていたのだからな」

言いながら、ツバキは彼女の容姿を他人の視線で眺め直した。

大きな目。

薄桃の唇。

胸元あたりは起伏に欠けるが、背丈からして低めであるのだ、むしろ調和がとれている。

まず、愛らしい方だろう。かといって、アリサやサクヤが多分に有す、異性にはつと息を吞ませる、袖振り合わせただけでもう魂抜かれて骨まで軟化するような、そういう色気はこれっぽっちも纏わない。

なんとというか、素朴なのだ。さしずめ田舎娘と都会っ娘の違いだろうか。

「まったく、どうしてこう両極端なのか。お前とアリサ、足して二で割れば丁度よく釣り合いの取れた奴ができあがりそうだな」

「善処しましょう。さみしい人間と思われたままでは、いくらなんでも具合が悪い」

彼女と違い、ツバキの方はいつまでも手が空いているわけでない。

支部長代理の席に座ったペイラー・榊と検討すべき案件があるとかなんとかのこと、エレベーターの扉の先へ去ってゆく。

それを見送ると、しばし腕組み、立ちすくんだ後、一旦部屋に戻ろうと彼女もまたエレベーターをしようとする。が、

(待てよ、思い返せば先の出撃、だいぶ物資を消費したな)

よろず屋はすぐそこである。

(丁度いい、この機に補給しておこう。先送りにして忘れてしまつては洒落にもならん) 何気なく下したこの判断が、結果的に彼女の命運を分けた。

かつん、こつんと硬質な音を立てながら、短い階段を下りてゆく。

ふと、視界が赤一色に覆われた。

とつさに返り血でも浴びたかと勘繰つたがさにあらず。間を置かずして、けたたましいサイレンがアナグラ中に鳴り響く。

「第二訓練場に小型アラガミ侵入！ 繰り返す、第二訓練場に小型のアラガミの侵入を確認！ ……」

(うそだろう)

つい今がした笑い話と切つて捨てた展開が、もう現実に行進している。いつぞ判じ物めいていて、にわかに入られられないのも無理はあるまい。まったくなんという間の悪さだろうか。

(余程普段の行いが悪い輩がいたのかのう。そうでもなくば、とても説明がつかんぞ、これは)

間抜けなまでにのんびりした思考の裏で、彼女はアナグラの地図を想起する。知りたいたいの第二訓練場の位置と、それに隣接するブロックだった。

「神機格納庫か」

答えが勝手に肺腑を衝いてまろび出た。

所有者を亡くした神機が保管される、静謐たるべき領域がアラガミによつて荒らされる——その事実には、彼女は軽く舌を打つ。

神機とゴッドイーターは一心同体だが、一蓮托生というわけではない。ゴッドイーターにとつて神機は生涯ただひとつ、なれども神機にとつてはさにあらず、必ずしも貞淑を守り切るとは限らない。ある程度は、融通というか、替えが効く。

実際、藤木コウタの使用している旧型遠距離式神機「モウスイブロウ」は、かつての雨宮ツバキの愛機。彼女が現役だったころ、ぶんまわしていた代物に改造を重ねた姿である。

このため仮にゴッドイーターが戦死しようとする神機の方はぬかりなく回収され、新たな適合者の現われを黙然と待つことになる。その場所が神機格納庫というわけだ。

(既に隔壁は下りていようが、出払っているゴッドイーターが戻ってくるまでとなると——駄目じゃな、まず耐えられん。ああ、なんと勿体ない)

潜在的な戦力が、こんなつまらないことで、他愛もない相手によつて一挙に失われようとしている。彼女は口惜しさに歯噛みした。

そこで、ふと気がついた。

(これしきの因果、アナグラの内部構造をおぼろげにでも把握している者ならば、即座に辿りきれぬわな)

そして、楠リツカ。

神機に対する思い入れと理解の深さたるや海の如きあの少女が、むぎむぎそんなことを許すだろうか。指をくわえて傍観するをよしとするだろうか。

(否であろうよ、あの娘に限ってそれはない)

確信をもつて言い切れる。

おそらくは、既に何らかの対策を施すべく現場に向かっているのだろう。身の危険も顧みず、為すべきことを為そうとしている。

「くっ、ふふ、よいではないか。いやいや実に結構だとも面白い」

奇妙な興奮があった。

胸の奥から湧き出して、ふっふつと肌を粟立たせるこの感覚。もしも彼女に飲酒の経験があったなら、すぐに正体を掴めたらう。

これは紛れもなく、酩酊感と呼ぶべきものだ。

衝動に突き動かされるまま、彼女は飛ぶように駆けた。今再び、彼女は常の軌跡から外れ始める。

※ ※ ※

「何しに來たの？ 君の神機なら……まだ使えないよ。戦えないなら、戦場に出ちや駄目だよ」

「人のことを言えるのか。大の男どもですらとうに退避しきつたにも拘らず、こんな場所に独り残ったお主に」

彼女が神機格納庫に到達すると、そこでは案の定の光景がまさに展開中だった。

機具に固定された種々の神機は、さながら見本市の如し。リツカはそんな部屋の端、ここもあろうに隔壁近くに設置された端末をせわしなく操作し続けていた。

「私も神機のロックが終わったらすぐに逃げるつもりだよ。何を考えているのか知らないけど、そのときになったら君も一緒に退避すること」

「異論はない。じゃがしかし、果たして無事にそのときとやらを迎えることができるかな」

「できるように今こうして尽力してるんじゃない。気が散る、ちよつと黙つてて」

了解、と言う代わりに彼女は小さく両手を挙げる。リツカのタンカに心地好いものを感じつつ、それが成就することはあるまいと見切つてもいた。

何故ならば、彼女の勤は今すぐ逃げねば間に合わないと告げている。ところが神機の

ロックとやらは、漸くのこと端の二つが始まったばかりだ。

その速度も、いかんせんどうしようもなく遅い。常日頃ならば何の問題もあるまいが、この非常事態に於いてとなると、もどかしいことこの上ない、身を焦がす遅行としかいいようのないものだった。

(やはり、やらねばならんかな)

唇を湿らせ、足早にリツカの元へ近付く。予感はとづくに悪寒に変化を遂げていた。

「お主の言うことは正しい。神機を持たぬ身でありながらアラガミを倒そうなどと、正気も狂気もぶつちぎった論外沙汰じゃ」

さりとしてな、と、意味深に口の端を吊り上げて、

「凌ぐだけならやりようはある。鬼札を失おうと、手札が零になったわけではないんじゃないから」

「え、——わわっ!?!」

彼女の手が体に触れる。次の瞬間、リツカは浮遊感の中にいた。

いつもよりずっと天井が近い。

(投げられた——)

理解の早いことである。

身の丈を超える巨大な神機を棒切れさながらに振るい、悠々と二段ジャンプまでこな

してみせるがゴッドイーター。その膂力をもってすれば、人間いつびき投げ飛ばすなどお茶の子さいさいというものだろう。

どさつ、とリツカはエレベーターのすぐ側に、隔壁とは反対側のところに落ちた。

「きゃんっー！」

なるだけ、こう、ふんわりと放つてやったつもりだが、それでも結構な音がした。

あれは相当痛かつたろう。後日、青痣にでもなるやもしれぬ。リツカに嫌われたくない。小腰をかがめて、彼女はすまなそうにした。

「なにをするのさー！」

「恨み言は後からたつぷり聞かせてもらおう。じゃが今は、目と耳塞いで口おっぴろげて、這いつくばってじつとしておれ」

クルクルと、指を動かすジェスチャー交えて語り聞かせる彼女の背後。落雷みたいな音を立て、ついに隔壁が吹き飛んだ。

わつと立ちこめる粉塵を越え、ヴァジュラテイルが姿を現す。おお、やつと美味そげな餌を見つけた、辛抱たまらん、いざや貪り喰わんと、いたずらに気焰をあげている。(どっつい、貴様には何も喰わせんよ)

電光石火、目にもとまらぬ素早さで身を翻すと、彼女はピンを抜いた閃光手榴弾を指から離した。

なだらかな放物線を描き飛び、それは丁度ヴァジュラテイルの鼻先二寸で破裂する。これが彼女の「手札」が一枚。殺傷能力は皆無だが、音と光で麻痺させて、動作をいくらか止められる。特にこの手の小型アラガミに対しては効果覲面なのである。

(要は時間を稼げばいいんじゃない)

元より彼女にみずからの手で襲撃者を屠る心算など毛頭ない。それはいまごろ、大急ぎでこちらに取って返して来ているはずの、他のゴツドイーターの役目であると心得ていた。

ゆえ、目的は、被害を抑える点にこそ。物的被害はある程度、目を瞑るもやむなしとしてその代わり、人的被害は決して出させぬ所存であった。

楠リツカを殺させない。それこそこの場に相応しい、達成すべき任務である。

よって彼女はヴァジュラテイルが怯んでいるこの隙に、リツカを連れて少しでも遠くへ逃げ去りたかった。新手なりなんなり、よしんば敵の追撃を受けても、通路各所に設置された隔壁と手持ちの物資を駆使すれば十分対処は可能であろう。

酔っ払った脳細胞でありながらここまで考えられる点、やはり彼女は並でない。しかし、ああ、悲しいかな。

「なっ——」

彼女の目算は外れた。

このヴァジュラテイルは、機能組成が変らしい。セオリー通りに動かなかった。閃光を浴び、身を竦ませるところではなく、逆に火の着いたように激しく暴れ、めくら滅法に尾を動かした。横薙ぎにふるわれる、その軌道上にすっかり彼女の身もあった。

あわてて後ろに下がろうにも、既に遅し。これは無理だ、物理的に避けられないと妙に間延びした時間の中で理解した。

「——かあ、はっ」

腹部を突き抜けた衝撃に、内臓が悲鳴を上げている。

とつさに後方へ跳んだことでいくらかダメージは軽減されたが、代償として踏ん張りがきかない。ごうと大きく宙を舞う。

（ああ、なんじやろうか。既視感じやのう、つい先日もこんなことがあったような）

時の遅延はなおも有効。加速する思考、感覚の暴走の只中で、彼女は激痛に苛まれながら着地体制を整えようともがきつつ、腸が煮えくり返るような思いを味わっていた。

（暗愚かわしは、失敗から何も学ばなかったのか。固定観念にべったり甘えて、少しでもそこから外れられれば途端にこれか）

赫怒と屈辱が身を包む。リツカにあれほど横柄な態度をとっておきながら、この醜態はどうだろう。恥さらしなことこの上もない。いったいどの面下げて詫びればいいのか、とんと見当がつけられぬ。

(あな情けなや、恥を知れ。大和男子ならば腹を切ってもおかしくはない、それほどまでの失態じゃ。まったく何をやっているんじや、わし、は——)

ありとあらゆる語彙を探つて、己の迂闊さを罵倒する最中。

(——あ?)

計らずしも、とうとう彼女は己が変調を自覚するキーワードを引き当てた。

(待て、なんじやこれは、この状況は。なしてわしはこんなところで、こんな真似をやっている)

激情が引き潮のようにひく。ありとあらゆる酩酊が、脳細胞から除去された。

(時間を稼ぐ? 果たすべき任務? 何を馬鹿な、方舟に乗るか否か迷った際、一度は切り捨てると決意した女のために、何故今になって命を賭ける)

アーク計画を肯定するとはそういうこと。コウタが家族と対話して漸く気付いた現実を、彼女は端から揺るぎなく、完膚なきまで心得ていた。

心得て、その上で選んだのだ。

とは言え、人の心はうつろう定め。

あれから暫くして、リツカもまた第一部隊の同胞と同位同格の領域に上がってきたと

考えられなくもない。

(ここはひとまずそうと仮定しておこう。しかし、ならばここにやってきた際、いの一歩に有無を言わせる暇もなく、リツカを気絶させてでも退避しておらねば理にあわぬ。アラガミと対面するなどという危険を犯すわけがない)

彼女にはそういうところがある。愛しい者に危機が迫れば、例えその意思を強姦し、誇りをめちやめちやに切り裂いても命の保全を図ろうとする傲慢が。

が、今回彼女はそういう真似をしなかった。あくまで限界ぎりぎりまでリツカのことを通させて、どうにもならなくなつてから、やっと動き出す遅鈍ぶり。

違う、違う。こんなものは断じて彼女ではない。

本能が最大級の警告を鳴らしているにも関わらず、阿呆面下げて他人の仕事を見学するなど彼女であろうはずがない。

(どういふことじゃ、これは。誰じゃ、あやつは。知らぬ誰かがわしの皮を被つて動いておる)

一連の動作を鑑みるに、そうとしか考えられないのである。

顔も、声も、仕草でさえも同一なのに、されど中身が全く違う。この嫌悪感、譬えるならば、くしゃみをしたら涙の中に蜘蛛がわさわさ蠢いてるのを見つけた気分。思わず胃腸が反転しそうだ。

そして、それゆえもう一つ、不慮の事態が巻き起こる。さながら悪夢の連鎖反応、地獄へ直結する穴をどこどこまでも転げ落ちるかのよう。

右手が動き、指先が何か硬質なものに触れる。着地はもうすぐだ、されど体勢は不完全。

倒れるのはまずい。一度倒れてしまったら、ヴァジュラテイルが襲いかかってくるまでに立ち直せないかもしれない。多少不恰好でも、なんとかして両の足にて着地したかった。

(これを支えにすればええ)

と、思ったかどうか。

兎にも角にも彼女はそれを握り締め、たたらを踏みつつ願った通りに着地する。

そう、たたらを踏んだ。勢いを殺しきれず、数歩後ろに下がったのだ。

支えにした物体が床に固定されている鉄柱か何かだったなら、こんなことは起こらない。生憎と、彼女がひつつかんだのは、一定以上の力を籠めさえしたならば、難なく取り外せてしまう類の物品で。

(この感触、重量、まさか神——)

視線をそちらにやるより早く、腹部の痛みもどうでもよくなる前代未聞の絶痛が、彼女の右手を刺し貫いた。

「——ッ!?　ぐうっ、お、ああっ!」

爪が、指が、掌が、腕が——別のナニカと入れ替わり、たちまち編み直されてゆく。神経組織を直接嬲られ、蹂躪されるこの感触は、古今東西発明されたありとあらゆる拷問手段を鳥瞰しても類型を見ぬ、別次元の苦しみだ。

白い炎が、眼窩の奥から噴き出した。

としか思えない。

未知の電気信号に脳内回路を焼き切られそうになっている、発狂寸前の彼女には、自分の口がどれだけ人類にあるまじき、獣じみた叫喚を鳴らしているかも気付けない。

「いけない、早く神機を離して!　適合していかない神機を持つと、拒絶反応でオラクル細胞に捕喰されちゃう!」

リツカがこれを見ていたならば、おそらくこうとでも言ったのではなからうか。

ところがリツカは目下のところ、閃光手榴弾の余波を受け、脳を揺すられ卒倒中だ。咄嗟の対応にしくじつたらしい。

如何に胆が練られていようと、前線慣れせぬ整備員の限界というものだった。

幸い鼓膜は破れていない。数分後にはなにごともなかったかの如く意識を取り戻せるだろう。もつともそれは、ここから先の数分間を生き延びられればの話だが。

「——」

視界が歪む。

床も柱も天井も、どこも真っ直ぐ引かれていない。ミミズの這った跡みたく、きたならしく、グニヤグニヤしている。

距離感が死んだ。

重力もよくわからない。

平衡器官に異常が生じているらしい。

間合いがつかめぬ。闘争に於いて、最も大事とされる間合いが。

本来ならば据物斬りも同然に、容易く殺害されるしかない、そんな状態。にも拘らず、いったいどういうわけなのだろう、彼女は敵の動きに対して機敏であった。

閃光手榴弾の衝撃から回復し、餌の思わぬ抵抗に怒りの声を上げながら、ヴァジュラテイルがとびかかる。

「お、のれがア——！」

があん、と、床も砕けよといわんばかりの勢いで一步踏み込み、握った神機を——それが第一部隊の先代リーダー、雨宮リンドウのものであると気付かぬままに振り下ろす。

当たった。

奇跡としかいいようがない。

が、浅い。

命にまでは届いていない。残心も甚だ不完全。荷重移動を制御しきれず、上体を泳がせた挙句、彼女はそのままふらふらと、床に片膝ついてしまった。

(まずい、この高さは)

はつと顔を持ち上げれば案の定、ヴァジュラテイルは恰も一個の鞭と化し、その場で旋回、尾による打撃を見舞わんとする最中だ。

先刻腹部の位置した高さに、今度は頭が浮いている。直撃すれば首から上が、柘榴みたいに弾けるだろう。

壁一面にへばりつく己が脳漿を幻視して――

「届けえー！」

背後から閃光が飛来した。

その光輝、彼女が見紛うはずもなし。神機の射撃によるものである。吸い込まれるような精確性で、ヴァジュラテイルを貫いてゆく。死神の鎌は途中で止まる。ヴァジュラテイルは身悶えしながらのけぞった。

(だが、何故)

目下アナグラにゴッドイーターは居ないのでなかつたか。振り向くというより股の下から覗き見るような無様さで、彼女は撃ち手を確かめようと試みる。

「立てますか?」

(誰じゃ)

声の印象を裏切らぬ、涼やかな面立ちの人物だった。線が、細い。柔らかそうな白い肉。彼女の記憶が確かなら、極東支部にこんなゴツドイーターは在籍しないはずである。

(若いな)

駿馬のような凛々しさと、妙に婀娜あだっぽい香気とが不自然なく同居している。

経験上、声変りも迎えていない少年にこそ宿りがちな魅力であった。

さりとて腰回りの雰囲気はどうも女性特有の——いや、こんなことを考えている場合ではない。

「ぬう、おっ」

ぶちぶちと、音を立てて断絶しかける意識の糸を、死にもの狂いで手繰り寄せつつ立ち上がる。そこを狙おうとしたヴァジュラテイルにもう一度、光弾が浴びせかけられた。

「今です、決めてください!」

「無茶を言ってくれるではないか、ええッ!」

騎虎の勢い、またの称呼をやけっぱちの精神で。

地球を持ち上げるほどの気組みで以つてもう一度——もう一度だけ、わが身を蝕む神機を担ぐ。

あとはもう、型もへつたくれもない。全身でヴァジュラテイルにぶち込んだ。「切断」というより、「叩き潰す」の語感こそが相応しい。不恰好この上なく、されどしかしそれゆえに、威力は十分、命に届くものだった。

「……は」

疲れた——と続くはずの言葉は声にならず、ヴァジュラテイルの息の根が止まったのを認めると、彼女の意識も急速に薄れていった。

※ ※ ※

(まあたここかい)

天井から降る照明だけで、彼女は居場所を察知する。つまり自分が、再び医務室のベッドの上に横たわっていることを。

異なるのは痛む位置。前回からちよつと下がって、主に腹部がずきずき痛む。ああそれと、視界に映る人影にも変わりがあるか。

数は三から二へと減り、うち一つは楠リツカとすぐに知れたが、もう一つに見覚えが

ない。

(看護師か? ——いや、)

よくよく見れば先刻彼女の命を救ったゴッドイーター、謎の応援Xだと判別できた。(近くで見ると益々困惑させられるわな。こやつ、男か、はたまた女か)

どちらであろうと頷ける、独特な眼差しの宿し手だった。ブラウンの瞳は、色素の薄さゆえであらうか。

「あ、気がつきまし」

「気がついた? ……よかつた…」

瞼を開けたことにより、二人が彼女の目覚めに気付く。そのやりとりに微かな違和を覚えつつ、彼女は上体を持ち上げた。

「今何時じゃ? わしは」

どれほど眠っていた——その問いかけは、しかし最後まで続けられない。

がぼつと、こう、感極まったといわんばかりに、抱きついてきたリツカのためだ。

「お、 おお?」

整備油の中に混じって、しかし明確に存在を主張し、鼻腔をくすぐる甘い芳香。少女特有のかぐわしきさといっている。かてて加えてすり寄せられる、自分よりも若干高め体温ときたらどうだろう。どんな名湯でも、ここまで骨を蕩かすような、絶妙の心地よ

さは実現できまい。いつまでも浸っていたくなる——陶然とした気分には駆られ、彼女はリツカを抱き返すだけの甲斐性さえも披露せられず、ただ目を細めるばかりであった。

「まさかりンドウさんの神機を使うだなんて。君は、いつも無茶して……」

やがて平静に返ったリツカが、ぽつりぽつりと呟きはじめる。それによつて彼女は初めて、

（ああ、あれは彼の遺品だったか）

その事実を把握した。

「約束だよ……もう二度と他の人の神機に触らないで」

それが如何に危険な行為か、ヒトとアラガミ、その中間で危うく揺蕩うゴツドイーターの均衡を崩壊させる所業であるか、懇々と説く楠リツカ。そちらはもとより、すっかり傾聴の姿勢になつて相槌を打つ彼女もまた気付けない。

「……そうなら、何が起きてもおかしくないから」

「肝に命じておこう。わしとてあんなのはもう御免じやよ、実は苦手なんぞで、痛いのは」

リツカから見て、ベッドを挟んだ向こう側。正体不明の、例のゴツドイーターが、ひどく意味深な緊張をその口元に浮かべたことに。

「そろそろ、皆帰ってくるかな……。君が目を覚ましたって言ってくるね！」

「ほ、ほう。皆、か。こりやまた説教の嵐じゃな」

渋い顔つきをしてみせる彼女に微笑を見せて、

「またあとで来るよ！」

とひとこと言い残し、リツカは医務室から退出した。陽気なことに、手まで振つて。

(さて、今度は誰に何をどれだけ責められるやら。お手柔らかにと頼んでみても、火に油を注ぐだけよな)

身から出たさびとはいえ、気が重くなるのをどうしようもない。彼女は思わずこめかみを押さえた。

「リツカさん……いいヒトですよ……。あのヒトは神機のことを、ホントに理解してくれている……」

謎のゴッドイーターが、おもむろに言葉を紡ぎはじめた。

「本人はまだまだ未熟などと謙遜しておったがな。あの非常時に格納庫へ走れたのは、並み居る整備員の中でもあやつだけじゃった。大した女よ、本当に」

「ともすれば無鉄砲と言えなくもないから、褒めていいのか迷うところですけどね、それ」

「若いからの。多少のやんちゃや無鉄砲さは若さの証明よ、何恥じることがあらんや。

……それより先刻は世話になったな、礼を言わせておくれ。ええと——」

「あつと……まだごあいさつしてませんでしたね。僕、医療班に配属になります新人の神機使いです。レンつて呼んでください」

（新人か、なるほど。そういえばアリサが前々から言い騒いでいたような）

後輩ができるとはしゃいでいた銀髪少女を思い出す。立て続けに配属直後の自分自身の記憶が目覚め、天国から直滑降、鬱を発症しかけていたが。

「本当は明日付けでこの極東支部に配属だったんですけど……たまたま予定が早まったのが幸いでした……。専門は軍事医療、特に神機使いのアラガミ化の予防及び治療を研究しています」

台本を読んでいるような不自然さはない。

新人とは言い条、妙に落ち着いた雰囲気だった。アリサの覆轍は、このぶんならば心配しないでいいだろう。つまり後々、何かの拍子に思い出す都度、衝動的に首を斬り落としてしまいたくなる暗黒歴史の作成は行われずに済みそうだ。

「この支部は、色んな意味で最前線なんですよね……皆さんの足を引っ張らないようにがんばります！」

「期待しておるよ。なに、お主ならばうまくやれるじゃろう。着任早々わしとリツカ、ふたりの命を見事救つてみせたのだから」

そこまで言ったとき、思い出したかのように腹部の痛みが再燃した。く、と彼女は顔

をしかめる。

「あつ……病み上がりなのに、すみません……さ、横になって体を休めて……早くよくなつてくださいね」

顔に似合わぬてきぱきした物言いに、彼女は唯々と従った。「医療班に配属予定」の肩書きに信を置いた格好である。言われた通りの姿勢になると、實際呼吸が楽になる。

ちらりと首を横に向けると、レンと視線がかち合った。邪気なき笑みになんとなくいたたまれなさが湧いてきて、あわてて元の位置に戻した。

その夜。

日が暮れて、消灯時間を過ぎてのち。

闇の帳の降ろされきつた病室で、しかし彼女はらんと双眸を見開いて、奥歯をきつく噛み締めていた。

安穩と、眠れなどするわけがない。仮に、よしんば、樽いっぱい鎮静剤を注がれようと、いまの彼女の精神を宥めることなど不可能だ。

我と我が身をさいなむ異変、本来ならばあり得ぬ軽拳——その正体を闡明すべく、頭脳は高速回転中だ。それはもう、煙を噴きだす一步手前の勢いで。

それほどまでの負荷を要する難問なのか？ ……いや違う。答えならばどうの昔に算出され終えている。が、その度に、

——あり得ない。あつてたまるか、そのようなことが。

と、握り潰してまた一から考え直すという不毛な繰り返しを行っているため、コゲツキかけているだけだ。

もちろん答えは毎回不変、些かのズレも認められないわけだから、こんなのは誰が見たつて徒労も徒労、ヒステリーの亜種だと知れる。

「ああ、くそっ」

彼女も漸くその愚を直視したらしい。現実逃避を続けられなくなった。

「やはりそうなのか。あれは——自滅願望だというのか」

その言葉を口にした瞬間、彼女は全身の血が冷水と入れ替わったかの如く身をふるわせた。

顔色は青を通り越して、白い。今首を刎ねたところで、果たしてどれほど血が出たものか疑問であつた。

程度の差はあれ、誰であろうと高所に立てば墜落を望む。列車が迫れば線路に身を躍らせたくなる。

毒物のラベルに唾つばを湧かせ、剃刀ならば手首にあてよう。

どれもこれもその先にあるのは明らかな破滅、絶滅、死滅。無条件に遠ざけて然るべきものなのに、どうしたことか惹きつけられる。断崖の先へ、一步踏み出してみたくなくなる。

理解が及ばないのなら、それは幸福至極なことだ。身近な例をいくつかひくと、重要なデータのたつぷり詰まった会社のHDDをフォーマットしてみたくなくなるとか、非常時以外押しはならない諸々のボタンを猛烈にプッシュしたくなるとか、スマートフォンに代表される精密機器を水底に沈めたくなるだとか、そうしたものが挙げられよう。死には至らずとも、その先に待っているのは小規模の破滅である。

この自壊の願望は、しかし彼女にだけは決してあつてはならないものだ。

驚異的なまでの生き汚なさ。死にたくない、一秒でも長く現世こゝに留とどまっていたいという絶対念慮——渴望と、どうしようもなく対峙する。

対極にあるものは異常に惹き合うか、相手の息の根を止めてやらねば気が済まぬとまで憎みきるかのどちらかしかない。この場合は後者だった。

○、○○一秒の悪魔が巢食う余地など、彼女の中に一厘たりとて存在してはならぬのだ。

ゆえ、全力を以つて封殺を図った。

跡形もなく焼尽し、残った灰すら二度と面を見せるなど無明の底へ隔離したはずだったのだ。なのに、

「亡霊めが。分際を弁えず、墓から戻つて来おつたか」

へモグロビンの味がする。咬合力に耐え切れず、歯茎から血が溢れたらしい。

何がこの忌々しい復活劇を招来したのか、考えるまでもなく自明であろう。

「分水嶺は、あそこしかない」

あの日、あの夜、あの瞬間。光の降るエイジス島で、彼女を直撃した感動。

あれは何も馬鹿正直に光景そのものに対して打ち慄えていたのではない。真に心を打ったのは、その直前。

——ありがと、みんな——

方程式を超越し、幻想と現実の垣根を壊し、アーク計画を覆し、そしておそらく地球意思すら驚倒せしめ、己がすべてと引き換えに終末捕食を月へ持ち去り、「みんな」を救ったアラガミの姫。

穢れなき純白の魂と、そこから生まれ出でた行いにこそ、彼女は美々しさを受け取った。尊いと、そう思いさえしたのだ。

無警戒で受け入れた感動は、彼女の存在を余すところなく直撃した。そう、深奥に封

じられていた破滅衝動さえも。

形を取り戻し、永き眠りから揺り起こされたアレはさぞかし歓喜しただろう。

何故ならシオの行為とは、とどのつまりは自己犠牲。滅びを望むものに対して、これほど相性のいいものがあったらこの世の何処にある。

ただ単純に刃を腹に突き立てたのでは、所詮負け犬の末路。惨めな敗北者の自殺、虫が一匹潰れた程度にしか受け取られまい。

ところが何かのために、とか、誰かのために、といった謳い文句を頭に付けなければどうであろう。急にそれが何やら崇高な、神聖さを纏ったものに変じてくるではないか。

どんなに言い繕おうとも、死は死。断絶という本質自体にはなんの変化もないはずなのに、どうやら人間には生まれつき何かのために殉じたいという欲求が組み込まれているらしく、急にひろびろとした気分ですること臨めるようになる。

まだ薄いとはいえ、ここ最近の彼女の精神状態は正しくそれだ。

感動を、感動を、感動を——脳髓を蕩かすあの甘い痺れをもう一度。味わうために、今度己自身で実践しよう。

おお、それはいい。いい考えだ。これはきつと前回以上の刺激があるぞ、やはり他人任せはよくないな。

だから、さあ、演じるための舞台をよこせ。

窮地とあらば喜んで首を突つ込もう。この際芽でも構わない、しつかり育てて立派な果実をつけさせてやる。

「醜穢な」

反吐を呑み下す思いであった。

「やられたなあ。死に焦がれ死を求め、酔いに酔つた亡者の舞踏。ここ一連のわしの行跡そのものじゃ」

そして何よりも性質タチの悪いことには、これは例え自覚してもどうにかできる現象ではないという、絶望的なその事実。

滅びの欲求とあの感動、すなわち彼女の美意識は既におそるべき純度で融和してしまつた後である。

一体となつて彼女本来の渴望を蝕むこれを、封印どころか分離させることさえ今となつては困難だ。否、まず不可能といつてしまつていいだろう。返す返すもあの刹那、忘我の感動に浸つていたのが悔やまれる。

今回ばかりは打つ手が無い。解決策が見えないのだ。

考えあぐねている間にも、生への執着が削り取られ真逆の渴望が肥大していく、ああそのおぞましきよ。

「結果的といえども、よもやお主に追い詰められようとはな。あれか、一度は同胞諸氏を

裏切りかけたツケを払えということか？」

侵喰速度は衰えない。むしろ加速の一途をたどる。共存不能であるならば、強い方が弱い方を駆逐するのは道理。

彼女の中身が空になり、まったく別のものと入れ替わるまでこの侵喰は止まらない。残された時間は、決して多いものではないだろう。

「たしかに傍からはそう見えるのだろう、なんと図々しい女だと。誰にも明確な意思表示をせんかったのをいいことに、何をのうのうと澄まし込み、元鞘に収まっていやがる」と

彼女がアーク計画に乗らなかったのは、なにも高尚な信念とか友誼とか、そういう要素は毫もない。

打算。生き延びるべく勝ち馬に乗るといふ、ただそれのみを目的とした打算の結果に他ならなかった。

「だがな、わしア決してそれを恥じぬぞ。頭など下げてやるものかよ」

そも本心とは、隠して然るべきものだろう。どんな美女も美男子も、腹の中身は凡百どもと変わらない、糞に小便、血潮に胆汁、色とりどりの内臓に、総じて臭気芬々たる代物だ。

皮に包んで、決して外に漏れないようにしているからこそ持て囃される。それと同

様、如何な人間であろうとも、その眞の姿は醜怪で、正視に堪えず、ましてや愛などとても注げぬ代物だ。

——ああ、だからこそ。シオはああまで、皆の心を攪つたのか。この穢土にてただひとり、腹の底のそのまた底まで清らかだったがゆえにこそ。

「しかし、わしは俗なのよ。みつともなく、薄汚れながら地べたを這いずる人間で、そうあることに満足している。お主のようになりたいなどと、そんな願い、間違つても抱くものか」

○、○○一秒の悪魔、ひいては己が美意識めがけ、宣戦布告と吐いた言葉は、彼女自身びつくりするほど弱々しかった。

世界は母親のようにやさしくなどない。人間ひとりの都合など、微塵も斟酌することなしに駆動する。

——今、アーク計画に勝るとも劣らない、巨大な嵐が極東支部を襲おうとしていた。

BURST編 Part 2

ハンニバル捕食作戦が発動されて暫くである。ふとしたことから死人の生存が確認された。

——逆ならともかく。

この終末の瀬戸際に、滅多にあるべきことでない。さしもの彼女も、足元から鳥に立たれた感じがした。

おまけに対象が対象である。

前の第一部隊長、雨宮リンドウその人なのだ。

彼女の先代を務めていただけあって、実力のほどは折り紙つきといっている。そこを見込まれ、よほどの枢機——アーク計画の進行にも携わっていた形跡がある。

が、内心密かにこれに反発、いわゆる面従腹背を装いながら、最終的には内部崩壊に漕ぎ着けようと立ちまわっていたのだが。ヨハネス・フォン・シツクザールの鷹の如き慧眼を誤魔化しきれぬわけもなく、「事故」を仕組まれ排除されたかつてのリーダー、それがリンドウという男であった。

とうに黄泉路についたはずの人物が、実は現世に留まって、何処かで生き永らえていた。この報により、極東支部は激しく揺れた。

歓喜した。

「リンドウが……生きてる……」

感極まったと声をふるわす橘サクヤ。リンドウとは恋仲だった女性である。

折に触れては彼の神機をじっと見上げて、瞳をしとどに潤ませていたサクヤのことだ。喜びなどと、そんな表現では生温い。

分類以前の純粋な衝動、ひどく熱い気の塊が胸の奥からせり上がり、たまらず口元へ手をやった。

「サクヤさん……!」

そこはアリサ・イリーニチナ・アミエーラも同様だ。リンドウの死——結果的には誤認だったわけだが——に深く関わり、重大な責任を感じていた少女である。

サクヤの感激にその心は音叉のごとく共鳴し、更なるたかぶりを誘発させた。

「フン……さつさと見つけて連れ戻すぞ」

いつも通りぶつきらぼうなソーマだが、言葉尻があらさまに浮いている。

無愛想に見えて情に厚く、存外可愛げのあるやつなのだ。古い戦友の帰還を想えば、しぜん心が沸きたって、蓋をしようにもついつい抑えかねたのだろう。

「よっし、そうと決まればさっそく行こうぜ、リーダー！」

「ええ…必ず連れて帰りましょう…必ず…！」

いまにも走り出さんと気負うコウタを、今日に限ってはアリサも止めない。

ことほど左様に、第一部隊の士気は上がった。当然といえば当然である、これは元々、リンドウの部隊なのだから。

健康な反応といつてよく、なんら驚くべき要因はない。彼女が、

(意外や)

と面食らう思いがしたのは、他の部隊のゴッドイーター、整備員に研究員、果ては一般の事務員までもが欣喜雀躍——脚に弾機ばねでも仕込まれたんじゃないかとばかりに舞い上がっていたことだ。

(暗い時代、という背景もあるんじゃないだろうが)

闇の黙しじまが蝟燭の灯火をいよいよ際立たせるように、暗雲たちこめ先行き見えない当世にあつて、明るいニュースはただ明るいというだけで、より一層の光輝を着せられ迎えられるものである。

(皆、希望に餓えているのだ)

おいやったな、と口々に言い合い、肩を組んで目端に涙を浮かべさえる連中は間違いないこの環境にあてられて——換言すれば、場に酔っていた。

(まったく、痛ましゆうて見ておれんわ)

昇降機にひとり乗り込み、やっと彼女は仮面を外す。

露わになった素の顔は、弔辞のそれと変わらない。

(分かっているのかね。リンドウの生存が確認されたのは、やつこさんのDNAとアラガミ組織片のDNAとが一致したからじゃぞ。つまり、彼奴は間違いなくアラガミに成り果てておる。ツバキも明言しとつたろうに)

その組織片とやらを持ち帰ったのが、他ならぬこの彼女である。

(返す返すも、あれは痛恨事であったわい)

慨嘆せずにはいられない。

ゴッドイーターは適性のある人間にオラクル細胞を混ぜ込んだ、半アラガミめいたモノ。これについては以前に触れた。にも拘らずなにゆえ彼らは施術後も、ヒトとしての心とカタチを保てるか。ゴッドイーターをホモ・サピエンスとアラガミとの中間に保つバランス。その正体は、なにも埋め込まれたオラクル細胞がその人物を宿主と認め、穏やかに共存しているだとか、そんな夢のある甘つちよろい理由からでは全然ない。ひとえに腕輪から注入されるP53偏食因子、これの効果に尽きている。

ざつくばらんに分かり易く述べるなら、P53偏食因子を充填された肉体はまずそうだから喰わないのだ。

むろん、オラクル細胞にとってである。

たとえ餓死する破目になったとしても絶対口に含みたくない、喰うくらいなら死を選ぶ。なるほど偏食とはよく言ったものだ。

では、ここで何らかの事故によって腕輪が外れてしまったゴッドイーターがいたとして、

外れた上に、修復不能なほどぼろぼろに壊れ、予備も調達できない状況を想定しよう。偏食因子は一度入れれば永続的に効果を発揮するような都合のいい代物にあらず。定期的に注入し続けなければ、呆気ないほど簡単に体の中から失せてしまう。

さすれば、人間にとっては悪夢でも、オラクル細胞にしてみればこの展開はどうだろう。突如眼前にこの世の贅の限りを尽くしたごちそうが現出あらわれるのも同然だ。喰らいつかない理由を探すほうが難しい。

(いまのリンドウがまさしくそれじゃ。彼奴の腕輪が外れてから、もうだいぶ時間が経っておる。げにおそるべき時間といつてええじやろう。アラガミ化の進行しきったゴッドイーターの治癒報告など、寡聞にして知らんわい)

驚くべきは、ほんの些細な痕跡だけでリンドウの生存を洞察し、その三秒後にはこんなところまで読みきってしまった彼女のアタマの回転速度。

(どのみち、殺すことになる。さもなくば檻の中で一生飼い殺しじや。悲惨という以外

ない、当人も、周囲の者にとつても)

然らばこの事實は胸裡に秘め、一切口外せざるのがどう考えても得策なのだが、息せききつてツバキとペイラー・榊へと報告したのはぜんたいなんの撞着だろう。

——考えるまでもない、癌腫の如くめきめき増殖しつつある、例の自滅への欲求である。

(ええい、いちいち最悪のタイミングで起動してくれる)

特にここ最近は活性化しっぱなしだ。

(どうやらアレは、わが手でリンドウを殺したくて殺したくてたまらぬらしい) うずうずしているのが、それこそ手に取るように分かるのである。

脳裏に浮かぶは、愚にもつかない三文芝居の一場面だ。

畜生に堕ち、もはや人界に仇なす怪物と成り果てたるかつての同胞、友人を、血涙を呑み心を潰し鬼となり、突き刺し殺す勇士の劇——。

あいつだつて自我があつたならこれを望む。殺すことが、死をくれてやるのが救いとなる場合があるんだ。

私を憎むか、ああそれはそうだろうな。これは一面、希望の芽を摘む行為であろう。

ならばいいとも、思う存分この身を憎み、悪罵を投げつけ怨み呪いの的とせよ。それがあやつを殺めた私の義務だ。

だがな、いいか、頭は下げぬぞ。私の口から謝罪の言葉を聞こうだなんて期待は持つな。

誰がどれだけ否定しようと、私は私の正しさを信じている。私は正義を貫き通した、誰に憚るところなし——と。

激痛に耐え、友の無念を背負い、彼の為にも前へ進もうと決意しているように見え、その実どうだ、手前勝手な自己憐憫に陶酔しているあのつらを見よ。

羨ましいとは思わんかね。己もその蜜を舌に乗せ、咀嚼したいと思わんか。

まったくなんと使いふるされた設定だろう。どんなに出来の悪い頭でも悲劇と理解し、涙を流せる陳腐さよ。

なればこそ我が気に入った。ああ、実に素晴らしいぞこの舞台。古来より手を変え品を変え、演出を凝らせど根にある骨子はみな同じ。

つまりそれだけ人に愛され、飽きることなく繰り返し返されてきたのだ、友殺しは。

ならばその突端に、わしが新たな一幕を刻んでやろう。この演目、是非とも成功させねばなるまいて。

(冗談ではないわ)

〇、〇〇一秒の悪魔が熱っぽく囁く睦言を、脂汗を流しつつ、根限りの力を籠めてはねのける。

(リンドウの殺害は、即ち社会的自殺じゃ。美談もへつたくれもない、何故こんな単純なことが分らない)

或いは、総て承知の上で欲しているのか。

なにせ彼女の美意識は、自滅、自壊の衝動と同化している。あれにとつては、アナグラ全体の床が一部の隙間もない針の筵と化す展開ほど喜ばしいものはないであろう。

(擬態の髓をこらして振舞えば、なんとか仲間たちの同調をかうところまでは漕ぎつけられよう)

仕方がない、ああする以外に手がなかった、お前のせいでは断じてない——と、消沈する彼女を慰め、悲しみを分かち合おうとしてくれるだろう。

しかし心の裏側では、

「あいつはリンドウさんを殺した奴だ」

「情けを知らない、人の心を解さぬ人非人め」

侮蔑と怨嗟の暗い焰がへばりつき、決して離れることはない。どころか時の流れを工サとしていよいよ盛んに燃え上がる。

(特にサクヤがどういふ目でわしを見るか。こればかりは想像だにしようないなあ)

希望に向かつて手を伸ばし、高く跳ねれば跳ねるほど、絶望もまた深くなる。

ひよっとすると落下の衝撃に耐え切れず、今度こそサクヤの心は砕け散らぬとも限ら

ない。

「どうしてよ」

もしそうなれば最悪だ。理性は完全に吹き飛んで、自制をなくした桶サクヤはあらゆる情念の行き場を下手人に求めることだろう。

これは水の低きに就くも同然な、物理的必然とっていい。

「リンドウは死んだのに、どうして彼を殺したあなたなんかが生きてるの？」

人間関係は一筋縄ではいかないのが世の常だ。麻のように縦横無尽に錯綜し、纏れ、絡み合っている。

そのうちひとつが大暴走を始めれば、後はもう、玉突き事故のごときもの。影響は全体に波及する。涙が涙を、血が血を招く破滅の連鎖がはしりだす。

悲劇に次ぐ悲劇の中で、いつしか彼女はかかる惨状を引き起こした総ての元凶として強烈に祭り上げられて、犠牲の丘を登らされるに違いない。

（いかなあ、とても生き残れる気がせぬ。ただでさえカンが失われつつある今、この展開は絶対にまずい）

こんな愁嘆場じみた席で落命するなど、馬鹿馬鹿しいにもほどがある。

畢竟、回避が賢明だった。

蚊帳の外とはいかずとも、浴びる火の粉は減らせよう。

(憎まれ役は他の誰かに任せるべし。すまんなあ、わしがみすみすあげな報告を許したばっかりに)

基本的に現実主義者な彼女らしい決断である。この方針のもと、隙あらば全速力で奈落へ下らんと希うあの衝動に目を光らせ、適宜抗い、今日この日まで歩んできた。

リンドウの生存確認のため、証拠集めに奔走したのも純然たる彼女自身の意思である。一度任務を受けたからには、きちりとこなさない限り無用な不信を招いてしまおう。

——あいつ、リンドウの生存を確信されたら、なにか困ることもあるのか？　しかし、その報せを持ってきた張本人だぞ？

——もしや、今になって隊長の地位が惜しくなったか。リンドウの復帰で、それが脅かされると恐怖しているのか。

と。
特にツバキに思われるのは避けたかった。あの女傑を敵に回して得なことなど何ひとつない。

だから既存の任務はしっかりこなす。が、

(深入りはここらまでよ)

幸いにして、第一部隊はリンドウの搜索から実質除外の目に遭った。ソーマ達は不満

たらたらだったけど、彼女にとってこれは天の恵みに等しい。

(あとは時の流れが解決してくれる)

上等とは決して呼べない結果となるが、それで一応は彼女の思惑通りに進む。

そう、そのはず、だったのだ。

なのに。

「…………アラガミ化が進行した結果、二度と人間には戻れません。また、人間によつて培養されたオラクル細胞は極めて多彩な変化を遂げる傾向にあり、一般的な神機が通用しない場合が極めて多い」

「レン、レンや」

そんな彼女の努力目論見、刻苦精励悉くを、まとめてむなしくしかねない自称軍事医療専門のゴッドイーターに、彼女は辟易しきつた顔をした。

「お主はもう少し空気を読む術を学ぶべきじゃな。いいかえ、一座の者がこぞつて酔っ払っているときは、己も酔態を装っておくのが世を円滑にまわすコツじゃよ」

「そんな、アラガミ化した神機使いの処理方法として最も効果が高いのは」

(なんとという小僧だ)

レンは彼女の言葉など、正しく歯牙にもかけなかった。

返答どころかおつかぶせるべく声量を増すこともなく、診断を下す医師さながらに淡々と語を継いでゆく。

(これは会話ではない)

通告、令達の類であろう。

彼我の立場を勘案すれば、新人風情が、なにを偉そうに能書き垂れてやがるかと一蹴しても許される。

「適合した者にしか扱えないという矛盾を孕むために、決定的な対策とはいえませんが」
「よせ」

当然の権利を、しかし彼女は行^っ使^わなかつた。

否、正確には行^っ使^えなかつた。

本来の意志とは裏腹に、彼女の中に誕生しているべつな「彼女」の妨げに由る。期待感に目を吊り上げて、さあ、早く続きを言ってみせろと舌なめずりする自己破壊のペルソナに。

(やめろ——これ以上、あいつに餌を与えるな)

レンの言葉の向かう先、何を示し何をさせようとしているかなど、とうに察しがついている。

——自分にしか出来ない、ただ我のみがそれを成し得る。

これらの限定条件は、倒錯家をして更なる恍惚の渦中へと傾倒せしめる典型かつ絶好の殺し文句だ。

要らない、要らない。そんなものは微塵も望んでいないのに——全身が心臓になったかと錯覚するほど高鳴る鼓動を、彼女自身どうしようもないのだ。

「アラガミ化した本人の神機を用いて、殺すことです」

「よせと言っておろうが、阿呆んだらあつ！」

わめくなり、彼女はレンの肩を掴むと、そのまま背後の自動販売機に叩き付けた。

けふつ、と、小ぶりの唇から空気の漏れる音がする。

レンの手からジューズの缶が滑り落ち、甲高い音を立て、雫を残しながらころころ遠くへ転がった。

「リンドウさんの足跡を辿って、運よく彼に出会ったとしましょう」

「こやつ、まだ言うか」

「もし、そのとき、彼がアラガミになっていたらどうしますか？」

レンは着痩せする性質らしい。

掴んだ肩の肉付きは、想像よりも豊かであった。その柔い肉にぐつと五指を喰い込ませ、肩甲骨を締め上げる。大のおとなでも悲鳴を上げかねない痛みに、しかし中性的な新入りは眉ひとつ動かさず耐えてのけた。

「貴方は、その『アラガミ』を殺せますか？」

「おおできるとも、微塵に刻んでくれようず」

勝手に動き、そんな致命的もいいところな暴言をまくし立てたがる口唇を、奥歯をがっちり噛み合わせて封鎖する。

おそるべき貌になった。

「言いたいことはそれだけか、小僧」

喰いしばった歯の合間から無理に絞り出すわけだから、声はしぜん、ひどく軋んだ、金属質なものとなる。

地獄との直通回線が開けたのなら、きつとこんなのが聴こえるのだろう。

「根拠を欠いた意味なき仮定をべらべらと。うぬは結局何が言いたい。わしをして何をしせしめたいのか、今、ここではつきり申してみいや」

知れたこと。どういう事情があつてのことかは定かではないが、レンは明らかに彼女をしてリンドウを殺させたがっていた。

先だつての襲撃時、彼の神機を扱い、拒絶反応によつて重度の侵食を受けながら、何故かこうして安定した状態にある彼女以外に、それは叶わぬ作業ゆえ。

「ふざけるなよ、わしア断じて斯様な真似はせんぞ」

と、命じられた通り、レンが唯々諾々と胸の裡を明かしてくればこうはねつける算段

である。続く台詞はこうだ。

「彼奴がどんなみでくれに変わってしようが、既に人の心を喪失してしようが、わしは殺さん。ああ殺らぬとも。身動きとれなくなるまで切り刻み、この古巣までひきずつてくれよう」

はたして、それは可能なのだろうか。レンによれば、アラガミ化した人間には通常神機が効かないはずだが。

(なんの、盛っているだけよ)

この点、彼女は樂觀していた。

何故ならアラガミ化した人間など、今まで山ほど実例がある。

思い出せ。適合検査の確立せざる初期段階では、フェンリルといえば新種のアラガミ生産場と横目で見られていたではないか。

悪所・汚点は殊更に抉り出し、実質以上に誇張して言い触らすのが民衆の習性なれど、火の無いところに煙は立たず。そう呼ばれても仕方のないくらい、さんざ失敗を重ねたのだろう。

では、そのときに生まれたアラガミ共は、彼等をアラガミ化せしめた神機を振るえる適合者の出現まで、無敵の存在として生物界に君臨しえたか？

(否——)

そんなわけがない。加えて、圧倒的な経験をはこる彼女には、元神機使いと目されるアラガミと矛を交え、討伐した実績があった。

——第一種接触禁忌アラガミ、スサノオがそれだ。

(あの生命力の強靱さ、確かに難敵ではあった)

が、今レンの話を踏まえて鑑みるに、あのしぶとさは神機が効きにくいのを誤認したものでなからうか。

(あと考えられるのは、ハンニバルのごとくコアを抽出されてもすぐまた新たなコアが生成され、生き返る、か)

もしそうならば、彼女にとってはかえって好都合である。

彼女がリンドウ捜索に対して消極的で、対面を避けんと欲していたのは、遭ってしまったえば彼を殺しきれずいられる自信がなかったからだ。この身はちよつと、あまりにも、殺戮に特化しすぎて。慣れないことはしたくない。

だがしかし、いくら殺そうにも殺せないのであれば安心だ。倒し、運び、復活しかけたらまた倒し、を繰り返してゆけばよいだけである。殺害時に蒙る災難に比すれば、遙かに楽な仕事といえよう。

「さすれば後は簡単よ。進化したアラガミ化は治癒不可能？　はん、確かに今はそうじゃろうな。じゃが、十年後ならどうじゃ。そのまた更に十年後なら。アラガミの研究

はまだまだ発展途上、それも連中の進化に引き摺られるがごとく、日々急激に進んでおる。期待する価値は存分にあると思わんか」

かつてはそれ——飼ひ殺し——を悲惨極まりない、と評していたくせに何を言つてやるのか、と突つ込みたくもなるだろう。

だが、あの時と今とでは事情がちがう。方針が転換している。万物流転の理ことわりに従つたまでのことである。

「たかが十年の苦痛・苦悩がなにするもので。人を救うとは、愛するとは本来それほど勇と忍耐を要するものじゃ。安易に殺して終わりにし、これで苦しみを除いてやれたと悦に入るのは愚の骨頂で、所詮薄っぺらな鍍金モノよ」

一連のセリフを練り上げるうち、奇妙なことに彼女は芯からすっかりその気になつた。

——これこそが正道、物の道理に違いない。
と。

我ながら喝采しなくなったのである。

企画屋が自家製の企画に興奮し、熱狂し、ついにはその最も激烈な信者と化すようなものか。とはいえ彼女の狡猾さは、

(まあ、まずは搜索本隊の報告を待つてからじゃな。彼奴がちゃんと不死の存在に變じ

ておるか、確かめるまで軽々には動けん。首尾よくなれておらんなら、他のゴッドイーター共に斃り殺されるのを静観しよう)

あくまで地固めを怠らず、軽拳を慎む点である。

そして、確証を得られたのなら——直々の出陣も吝かではない。むしろ望むところといえた。

だから、万が一にもその場にリンドウを殺し得る物品——彼の神機を持ち込まれるわけにはいかないのである。

「意味の無い仮定、とは心外ですね」

一方、レンはあくまで死を与えてやるのがリンドウにとっての救いだと信じている。

彼女の論は重病人をとにかく生かせとチューブだらけにする医師と本質的に変わらない、思考停止の所産であるとせせら笑うに違いない。スパゲティ症候群が、本人の幸福に繋がるものか、と。

しかし、どうも真正面から角突き合わせて大舌戦、というのは不利そうだ。彼女の準備が万端なことを、鋭敏な感覚で察知していたわけである。

よって、明言を避けた。正面突破は無理と見限り、搦め手を用いた。

「身を引き裂かれんばかりの悲劇が日常茶飯事として横行している昨今です。最悪の

ケースを想定し、物理的にも精神的にもこれに対する備えを築いておくのは、神機使いとして当然の所作だと考えますが」

「ほう、薫陶を垂れてくれるかよ、百戦の雄たるこのわしに」

彼女の失敗は、売り言葉に買い言葉、ついレンの語りに反応してしまったことだった。しかも咄嗟に切り返し得る理を用意できなかったばかりに、権威を持ち出したのがなおまざい。

無用に武勇や経歴をひけらかすのは、とどのつまり不安や動揺の裏返しだ。このテのものは第三者の口から口へと伝わればこそ効果を發揮するのであって、本人が直に囁きしてしまうと、相手が余程の馬鹿でもない限り、たちまち威力は霧散する。

「ええ。誰もが貴方をひとつの個体として完成しているように思っていますが、僕から見れば貴方ほど脆く、不安定で、危うげな存在は他にない」

「な、に?」

「ある意味、極東支部で一番弱いのは貴方だ。是非とも教えて欲しい——貴方は、どうしてそんなにもちぐはぐなんですか?」

「——」

絶句した。

(ちぐはぐとは、うまい言い方をする)

なるほど真逆の渴望同士が絶えず鎬を削り続ける彼女の内海、その色相は、濃縮された染料同士が混じり合つてさぞかし混沌としているだろう。本来一色を以つて基調とすべき根底部分がこんなザマでは、まったくいかにも不安定で、ちぐはぐだ。しかし。

(かつて、ここ)まで他人に見透かされたことはなかった)

その事実こそが、彼女に形容不能な衝撃を生む。

奥の奥に在る本性は隠匿されて然るものだど心がけ、他人には幻影を掴ませ、世を渡りゆく腹芸の名手。彼女に自覚はなかったが、このことはいつしか淡い矜持となり、その小さな軀を支える一助とすらなっていた。

それはそうだろう、どんな道でも休まず延々走り続けば、稼いだ距離、その長さを誇りたくなる。

その矜持に、看過し難い重大な傷が刻まれた。

「――」

あまりのショックに脳はカラカラに干からびて、ガス交換の仕方を忘却する肺腑。

一時的な全身麻痺にも似たこの症状になんら打つ手もなく、彼女は己が手の内から脱け出すレンをただ呆然と見送った。

「この世界はいつだってわがままで、理不尽な選択を迫り……それが現実として連綿と続

いていく」

毅然と向けられた背の向こう、まだなにごとか喋っているが、彼女の耳にはその半分も届かない。

(負けた)

その三文字だけが、意識をひたすら乱舞する。

(重い――)

軀が、である。叶うことならいつそ、膝を折ってしまいたかった。

ただひたすらに、みじめであった。老いて病んだ野犬でもここまで暗澹たる心持にはなるまい。

「…変な話をしすぎたかもしれません。医務室に戻りますね」

伝えるべきはすべて伝えた満足したか、あるいはこれ以上何を言っても無駄と判断したのか。いずれにせよ、一転朗らかに言い残すと、レンはその場から去っていった。

後には唇を噛んでうつむく彼女と、ゴミ箱の上にて静かにたたずむ空き缶のみが残された。

※ ※ ※

「リーダー、その……大丈夫ですか？ 何か、ひとりて抱え込もうとしてみませんか？」

アリサの言葉、その一語一語に籠められたいたわりの念が胸を打つ。

が、大丈夫なわけがなかった。

レンと起こしたひと悶着で彼女が負ったダメージたるや甚大で、しばらく経った今日でもなおしつこく尾をひいている。傷口は未だぱっくり開いて瘡蓋にも覆われず、艶めかしく濡れそぼったままなのだ。

その理由は、分かり過ぎるほどに分かっている。

（塩を塗りこむ者がいる。激痛欲しさに、掻き筆つては新鮮な血を溢れさせようとする屑が）

よりもよって、彼女のなかに棲んでいる。

——いや、そろそろこの言い方では語弊があるか。既に力関係は逆転しているのだから。

元の彼女はいまや、胃の腑で溶かされるのを待つ残留物といった立場だ。

（嗚呼）

そのため、ここ近来の出来事は、さながら路地裏で見る影絵の如し。厚みに欠ける——我が身、我が事という切羽詰まった現実感がまるでないのだ。

小さなことは食堂の新メニュー導入から、大なるものにかけてはリンドウⅡ黒きハン

ニバルと発覚するまで色々あったはずなのに。

(そういえば、そんなこともあったような)

この印象の儚さは、いつそ笑ってしまいたくなるほどだ。

(レンの奴にとつては、この上なく都合のいい展開じゃろうて)

現在専ら表層に出ている「彼女」は、リンドウを殺すというその行為を、この世で何より甘美な蜜と認識している。その刺激に恋焦がれ、待ちきれなくてうずうずしている。

場と術さえ提供してやれば、「彼女」はたちまち仕遂げてのけるに違いない。

(詰みじゃな)

なにがどう転ぼうと、もはや彼女は死ぬしかない。リンドウを殺して社会的に死ぬのが先か、完全に「彼女」に溶かされ、消化されるのが先か。

(いや、もうひとつある)

どういう作用によってなのかは計り知れぬが、時たま、急に頭がすつきりして完全に元の彼女に戻り、軀を思うままに動かせることがある。

このとき、まず彼女の眼前には自分の置かれた状況のまずさを示す情報が津波のごとく押し寄せてきて、

「なんとこういうことじゃあ、これは」

愕然となり白眼を剥きかけ、次いで総てに於いて後手に回った己の間抜けさを呪い、口惜しさに臍を噛みまくる。一連の流れは、もはや様式美と化していた。

第三の選択肢が浮かんだのは、この後である。

「どちらにも出口のない、袋小路の死ならば、いつそ」

自分を保てている今の内に、我が手で生を終わらせる。つまりは自刃だ。

やろうと思えば簡単である。ゴッドイーターといえども、うまくやれば短刀一本でこことは足りよう。

「何が第三の道じや。袋小路の中の死には、何の変わりもないではないか」

厨房からちよろまかしてきた包丁一本。その刀身に映る彼女の口元は、うっそりとした笑みをたたえて歪んでいた。

それが、つい十分前の出来事である。せめてもの気分転換に、と自室を後にしエントランスへあがってきたが、

「ふむ、わしの顔はそんなにひどいか」

アリサは無言でコンパクトミラーを差し出した。仮にも女性相手に、その言葉を使うのは躊躇われたに違いない。

「ぬ——」

自制心を掻き集め、のけぞることだけは防げたが、呻き声が漏れるのまではどうしようもない。

年頃の娘の所持品らしく、花の意匠をあしらった可愛らしい鏡の中に、いつびきの幽鬼が佇んでいる。そつと指を伸ばし、土気色の肌をなぞった。

死人のように冷たい。陳腐な比喩だが、これ以上相応しい表現はなかった。

「実は、わしア冷え性なんじゃ」

「リーダー」

誰が聞いてもすぐに嘘と見抜ける嘘を、どうして人は口にしてしまうのだろう。余計大きな数寄を晒すだけだというのに。

とつさの反射的行動であつて、理由などないのかもしれない。とまれ、これを契機にアリサは堰を切ったかのような怒濤の説教を開始した。

どうもこの玲瓏な声の持ち主は、例のハンニバルとの交戦に於ける一件以来、彼女に對し過保護になつたきらいがある。

「……、リーダー、ちゃんと聞いてますか!？」

「おお、勿論じゃとも。しかし、くく、こう、説教を受けるなぞ、何やら久方振りで面映ゆいな。こつとも真摯に叱ってくれたのは、婆様を除けばお主が初やもしれん」

「おぼあさまっ」

きよとん、と、アリスは目を丸くした。彼女が自分の家族構成等の、所謂「過去」を話すのは未だかつて一度もなかったことだから。

（——そう、私達はあまりにもこの人のことを知らない。あんなにも一緒に戦ってきたのに）

と思うアリスだが、なまじい一緒に戦ってきたからこそその結果であろう。

（あまりに強くて、強過ぎて。……どこか同じ人間という気がしなかった。ヒトを超越した絶対的に揺るがない、不動の山みたいな頼もしきが無条件で抱いてたんでしょね）

だが、あのとき知ってしまったのだ。

（山だなんてとんでもない。リーダーだって私達と同じ——いえ、私達の中で誰よりも、儂く、小さい、ただの人です。傷付きもすれば悩みもするでしょう）

ところが、アリスがいくら記憶をあらってみても、そんな弱々しい彼女の姿が見付からないのだ。彼女はいつも、いつだとして、不敵な笑みを浮かべながら後に続く者達を導いてきた。

こんなことは有り得ない。完璧な人間など、理想郷ユートピアと同じで誇大妄想狂の脳内にしか存在し得ないモノだから。

もしそう見える者がいるとすれば、それらしく振舞っているだけなのだ。

(とすると、あれは仮面だったのではないかしら)

そこに思い至るや否や、アリサはいてもたってもいられなくなつた。

相手が自分に抱いているイメージを崩すまいと狂言を演じ、虚勢を張る。これは一種のいたわりであり、優しさのあらわれであろう。だが、それもこうまで徹底されると、(痛ましいですよ、リーダー)

仮面の下に隠された、彼女の素顔はどうなっているのか。

誰にも拭われることのない涙は、いったい何処へゆけばいいのか。

少しでも情のある者ならば、理解したいと願わずにはいられない。

けれど彼女は相変わらず、つけ入る隙のないままで——どうしたものか、と攻めあぐんでいたところにこの弱り目である。

「然り然り。わしを擁護し、養育したのはとあるしわくちやな老婆であった、と——。話したことはなかつたな、そういえば」

相変わらずひどい顔色のくせに、茶目つ気たつぷりな目つきをして、

「聞きたいかえ？」

なんて訊かれれば、答えはひとつに決まっていよう。

「はい、すつゝく」

「ようし、然らば善は急げじゃ。さつそく部屋に行つて布団を敷こう」

「は——い？」

「どうした、ここの寝具は布団ではなくベッドである、なんて野暮な突っ込みはなしじゃぞ」

「いえ、そうじゃなくて。えっ、なんで布団？」

「内容が内容じゃ。真つ当な形式ではなんというか、かたつ苦しいやら滑稽やらで話し辛い。口が重うてかなわん。寝物語にするほかない」

「ね、寝物語って」

それはあれか、夫婦や恋人がひと情事終えたあとで、腕枕なんかしながら繰り広げるアレのことか。

（あのピンク色空間を作り出す？ 誰が？ 誰と？ えっ、リーダーと私が？ ふたりとも女同士じゃない、非生産的、って違う、それ以前に）

「駄目、だめですってば」

「むう、そうまで固く拒絶されると傷つくのう。あれほど本音をさらりと漏らせる手法はないし、冷えびえとした我が身にも、お主の肌で熱が戻る。一石二鳥のうまい手だと思うんじゃない」

「っ、リーダー！ 私は真面目な話をしてるんです！」

盛大に脱線しつつある軌道を修正すべく、気を引き締めて一喝するアリサ。が、それ

に対する彼女の反応は、完全に予想を超えたものだった。

「……冗談で、言っているよ、思うのかえ。なあ、アリサ——」

一字一句囁み締めて、さも丁重気に送り出された言葉には、底の知れない憂いの韻律が宿っていた。

こんなものを肩に手を添え、瞳を覗き込まれながら、産毛をくすぐるように囁かれたのである。

どくん、と。

不必要なまでに大きく跳ねた心臓を、いったい誰に責められよう。

初心なアリサは、あわれなまでに蕩けた。口をついて出てくるのは、意味をなさない奇妙な音の塊ばかりだ。思慮の統制がとれていない。

その様子をじつくり味わうと、

「あっはははははははははは」

突然大笑をはじめた彼女に、アリサはただ目を丸くした。

「いかにも冗談、戯言の類よ。すまんなあ、お主があまりにも可愛らしいものだから、つかつかいかいとうなった。いやあ、愛いのう、愛いのう、いいものを見た、寿命が延びる。危うく本当にそちらの趣味に目覚めるところであったわい」

これがアリサの金縛りを解いた。雪をも欺くその肌が、みるみる朱に染まってゆく。

怒りと、羞恥がこみ上げてきたのだろう。

数秒後、それは頂点に到達。大音響の叫びと化して、エントランスの窓をびりびり揺らし、無関係なヒバリをも危うく卒倒させかけた。

※ ※ ※

端から見ればかなり最低な仕打ちを受けたアリサだが、不思議とその心中に恨みはない。

感情はどろりと堆積せず、逆に清らかさを増して流れる。

(あの目)

こうして自室に戻り、ベッドに身を投げ出しても考えるのは彼女のことだ。家路を失くし、夕闇に脅え、惑う幼子のようにであったあの瞳――。

(リーダーのあんな目は、はじめて見ました)

アリサにはどうしても、あれが冗句や酔狂でつくれるものとは思えないのである。

あの一瞬、確かに彼女は赤心をあらわにしている。

それと悟られぬよう、誤魔化すために態とあんな痴言を吐いたのではあるまいか。

考えれば考えるほど、この想像が確かな質量を伴い息づいてくるのである。

(……な、なら、私があの提案に頷いていたら)

その先を想うとまた顔面が熱くなり、心中悶々としてきてどうしようもない。ついには枕に顔面を埋めて足をばたばた上下させた。

アリサはすっかりこのように合点して疑われないが、実際のところはどのようなのである。

(どうもこうもない。認めようぞ、不覚であつたと)

以前、レンにひどい手傷を——精神上に——負わされた場所に舞い戻り、舌が拒絶反応を起こしかねない液体を強引に飲み下しながら、彼女はひとり苦笑する。

「やはり、まずい。こんなものを好き好んで飲みたがるとは、あの小僧め、どういう味覚をしとるんじや」

この劇物を用いればその言外の刺激によつて、完全覚醒していられる時間を増やせるのではと期待しての試みだったが、どうも浅知恵に終わりそうだ。

(いかなあ。死に近付きつつあるせいかな、どうも感情が湿っぽく、諸事感傷的になりつつある)

彼女が気心知れた仲間さえ自分のことをあれこれ語りたがらないのは、なんてことはない、至つて単純な羞恥心からだ。わけもなく、ただ恥ずかしい。

語るという、その行為が、である。決して過去そのものを恥じているのではない。

けれども死に瀕した者の多くがそうするように、せめて何かを、己が生きた証をこの世界に残したい、せめて誰それには自分のことを取りこぼしなく識っておいてもらいたい——そう願う心、発作的な精神機能が、いつとき羞恥を眠らせた。

「これは弱さじゃ」

いまさらになつて切り捨てる。

（理解を望む。どうせ理解されないとあからさまにいじけてみせる。これらは弱さの中でも厳にして慎まれるべき、甘つたれた餓鬼の懦弱さそのものである）

こういうアタマの仕組みであるから、話題のはしに祖母のことを上らせた時点で既に失態。やれ面倒なことになつたものよと思つたが、

「お主には関係ない」

と露骨につっぱね、拒絶の意をあからさまにすれば却つてアリサの関心を惹こう。意固地になり、何が何でも聞き出してやると気炎を上げる可能性とである。

だから、あのような方向に話題を持つて行つた。ああ言えば八割方、アリサの思考は処理落ちし、何も出来なくなるであらうと踏んでやつた。現になつた。

（じゃが、十割ではない。なんと二割も他所へ流れ、わしの提案を受け入れる可能性があつた。業腹なれども、そちらの展開をこそ望む心の存在もまた事実。そう、かまわなかつたんじゃよ、アリサ）

そうなれば、彼女は一切合財何もかもを、洗い浚いぶちまけてしまうつもりでいた。思い切りのいい話だが、現実的でなくも思える。

なにより量が膨大だ。とても一晩では語り尽くせないだろう。喉がカラカラに嘎れてしまう。

加えて、彼女という存在の特異性はちよつと言葉で表し難い。

それはそうだろう、狂気的な生への執着による第六感の超鋭敏化だの、それが蝕まれることによつて人格まで死にかけているだの、いったい誰が信じるという。まるでSF、夢見がちな少年の日の妄想だ。

特に後者に至つては本末転倒もいいところだ。所詮後産の付属物に過ぎない渴望が失せたところで、どうして人格が崩壊する？ 夢中になつてのめり込んだ対象に、ある日突然熱が冷め、棄てて二度と顧みなくなるなんてのは、至極ありふれたことではないか。多感な時期なら尚更だ。

が、彼女に言わせれば、その本末転倒を引き起こすからこそ「狂的なまでの念」であり、常軌を逸した特殊技能に指を掛けられもするわけである。

(と、いくら必死に説こうが無駄なことよ。言葉を介しての伝達、その限界というやつじゃ)

しかし、ここに例外が存在する。

言語に頼らず、言語よりずっと明確に、心の内を伝えきる手段が。

——新型神機使い同士の、感応現象である。

お主の肌でうんぬんとほざいた彼女の真意はここにある。色欲ではない。

衣服越しの接触では、アレは起こしにくいからだ。それに今回は、こつちの心をあつちの心へまると突つ込むに等しい所業を行おうというのである。万全を期すため、接触面積はなるだけ多く確保しておくに越したことはない。硬質そのものな合理的判断に基づいての言だった。

(それで。伝えて、どうなるという。賞賛してもらえないわなあ)

彼女の道程は打算と合理の集積物だ。腹の中身は墨汁よりも暗い黒。アリサにしてみれば、同じ人間と想っていた相手が実は人皮を被つただけのエイリアンだったようなものである。おぞましさに歪む顔が実に容易に想像できた。

卑下はしない。

むしろ誇らしく思っている。これこそ我よと胸を張る。けれどもしかし、だからといって他者にまで同じ認識を強要するのは、いわばある種の脅迫で、反発が起きるは必然である。

(困ったぞ、何をどうしようが結局は、余計な軋轢しか生まれ得ぬ。なんの益もありやあせんじやないか)

が、もし万一。

アリサの彼女に対する情愛が、彼女の想定を大きく超えていた場合にのみ限って、奇怪な臓物をまざまざと見せ付けられようと、それを拒絶しない可能性が仄見える。

それを蔵する彼女を、あろうことか受け入れてしまうご都合主義が発生するのだ。

これこそ先刻彼女が賭けていた展開。紙のように薄い確率に、全財産を注ぎ込む気であった。

一見すると自滅衝動の発露だが、まったく違う。彼女にとつてその先の果実が、勝負するに値するほど価値のあるものだったまで。

(はて、果実とはもったいぶった言い回しを使う。いったい何を指しているのやら)

缶はいつの間にか、すっかり空になっていた。

(答えの分かりきつている自問は何時以来か。それほど昔でもなかりうに、もう十年前のことに思えるわ)

そう、分かりきつている。なのにそれを認められず、そっぽを向き、別の何かがあるはずだと一から考え直すところまで、前回辿った道と全く同じだ。

人の成長がいかに難事であるのやら、窺えそうなものである。

「――屈辱じやな」

掌中の空き缶が、音を立てて大きくへこんむ。まったく屈辱的なことだが、それが真

実である以上、やがては直視せざるを得なかった。

理解の果てに彼女が求めた究極のモノ——それは抱擁だった。

母が娘にするように、無限の慈愛を以ってして、表も裏も美も醜も、総てを包み、抱き締めて欲しかったのだ。

「たわけ。どうしようもない甘ったれの、大たわけがッ……！　母の乳房を欲しがる歳でもあるまいに！」

空き缶は既に缶としての体裁を留めていない。わけのわからぬ金属塊と化し、尚も圧縮され続ける。

当然、彼女の手も無事では済まない。皮膚は破れ、裂けた肉から血が溢れた。

(時間を置かれたのが災いした)

白州に引き据えられ、判決の後すぐさま首を刎ねられる身であったなら、彼女はこんな無様を晒さず逝けたろう。が、こども長々と、一枚一枚、薄皮を剥がすようにして、ゆっくり削られ死んで逝かねばならぬとなると、どうしても最期まで意気を保つのが難しくなる。ふとした拍子に心気が萎えて、愚にもつかない弱気が漏れる。

誰かに縋りつきたいと、そういう迷いがふと兆す。

(情けない——ひとには忍耐を強要しておきながら、なんだわしは)

かつて此処で、レンとの対話のときに描いた構図、その中に於いて飼い殺しにされる

リンドウや周囲の者のことだろう。

（鬱陶しゆうてかなわん、自戒せよ。こんなものに囚われておつては、助かるものも助からんわ）

驚くべきことに、彼女は未だ一抹の希望とやらを捨てていなかった。

そも、かかる窮状に陥つたのは、シオの自己犠牲を目の当たりにしたため、つまりは外界からの刺激が元だ。

ならばそれと正反対、本来の渴望を一挙に膨張させ破滅願望を駆逐する、そんな起爆剤めいた「何か」もまた、この広い人界の何処かにあつて然るべきではなからうか。

（我ながら、なんとまあ空想的なことか）

空想的でも絵空事でも、もう彼女にはこれっぽちしか残っていない。そしてこんな些細なものでも、自害を押し留めるだけの効力はあつた。

（諦めるものか。例え最期を迎えるその瞬間でも、勝負は投げぬ。焼かれながらも耐え続けてくれようぞ。諦めて、たまるものかよ、畜生め——）

ところが、その最期がきた。

※ ※ ※

時間ほど無情なやつはない。どれほど必死に待つておくれと頼んでも、そ知らぬ顔で頭の上を越えてゆく。

(負けたわ)

アナグラのエントランス、その上段に設置されたソファアに腰かけ、彼女は敗北を嘯み締めていた。

照明がやけに眩しくて、たまらずそつと目蓋を下ろす。その裏側にひどく懐かしい姿を認め、

(婆様、負けたよ、わしは——)

と、はにかみながら報告した。

あの反則的なカンの鋭さはとつくに失い、いまや常人かそれ以下の地平にまで墮ちている。にも拘わらず、うなじの毛穴が残らず閉じ、逆立っているのはどうしたことか。何かとてつもない凶事、極東支部の命運すら左右しかねない大異変が迫っている、その証と見るが妥当だろう。

なのに彼女は、それに対して思いをめぐらそうとさえしなかった。完全に黙殺しきつている。

(わしはもはや、死人じゃよ。死人がいちいち現世の活動に気をとられたりするものか)

そういう腹積もりであった。

死に抗い、希望を捨てず、一分一秒でも長く生き続けようと必死にもがいたあの彼女は、つい先刻、たった数時間前に息絶えた。

無念、怨嗟、憎悪、後悔、慙愧、嫉妬、哀切——およそ思いつく限りの負の感情を撒き散らしながら、完膚なきまでに死に果てた。

ここにいるのは、残影だ。

生への執着、それがあまりに鮮烈過ぎたため、魂に焼きつき、大元が消えてもなお残された輪郭の跡。

生き汚さもここまでくればいつそ見事だ。表彰ものといつていい。

が、そうは言っても影は影。質量を持たない虚。発展もなく、進化もない。あらゆる意味で本体とは比べるべくもないだろう。

何が出来るというわけでもなく、そう時を経ずして主の元へ逝くしかない、何のため存在するのかさっぱり分からぬ、ああその哀れさよ。

蜉蝣ですらその短い生涯の中でつがいを見付け、子孫殿昌をたのしむというのに。

哀れといえば彼女もまた哀れであった。血を吐くような忍耐をあれだけ重ねておきながら、ついにはそれが丸ごと無駄だったと証明されてしまったのだから。

無意味な足掻きからは無意味なモノが生まれるのやもしれない。この図ばかりはと

ても笑つてやる気になれず、ただただ悲惨という以外にない。

死を嘲笑い、生を虚仮にし、一時、一瞬の快樂をむさぼることを至上命題とする新たな「彼女」も、流石にこの状況には憐憫を催したのかもしれない。今、この軀は残影の——紛らわしいので、以降の表記は彼女に戻す——完全なる支配下にあつた。

(鬼の目にも涙、というやつか)

しかし、せつかくの好意を受けても彼女には何をしたらいいのか分からない。

(これが真正正銘最後の機じゃ。次は絶対に有り得ない。なら、今度こそ腹を搔つ捌くのもありじやろうが)

それを実行するだけの心の弾みが、もはや彼女には残つていなかった。

本来の彼女であれば、このような情けを受けたなら、

「おのれ、わしを愚弄するか。よかろう、それが如何に浅慮か思い知らせてやる。無間地獄に堕ちながら、貴様の悔恨に噎び泣くさまをとつくりと見物してくれるわ」

と血が逆まくほどに怒り狂うにちがいないのに、現実には猫のごとく大人しくしている点、口調だけでなく精神まで老境に入ってしまったようである。

(別段、もつたいぶつてせねばならぬ儀もなし。こうして目蓋の裏に過ぎし日の幻影を燈してまどろんでいよう。さすれば眠りに落ちるのとなんら変わらぬ感覚で旅立てる。先のアレを踏襲するのは、御免じやよ)

こんな心境でいたものだから、彼女はなかなか気付けなかった。

もう随分前から己の隣に何者かが腰を据え、おまけにずっと表情を覗き見られていたことに。

「――！」

「あ、やっと気付いてくれましたね。あんまり反応がないものだから、てつきり眠っているのかと思っちゃいましたよ」

目を開けて、真つ先にとびこんできたのは淡い桃色の髪の毛で。それだけでもう、彼女には持ち主が誰か特定できた。

「――カノンか」

「はい、お久しぶりです。同じアナグラの中で生活しているのに、逢わないときは逢わないものですねえ」

「縁とはそうしたものじゃろう。何処へ行つても同じ顔に遭遇し、すわストーカーかと早とちりすることもあれば、逆に壁一枚まで迫れども、悉く対面には至れないときもある」

「そこまで言つて、気が付いた。」

「……ん？ いやまて、お主とは最近会っているぞ。ほれ、行方不明になつておつたあのとき、お主を追っかけとつたツクヨミを討つて連れ帰つたのはわしらじゃろうが」

彼女の意識が茫漠としてゐる間に起きた、現実感のない出来事のひとつであるが、たぶんこの流れで間違っていない。

未知のアラガミ、それも桁外れの戦闘力を有す個体と、不意の遭遇。あまりのことに恐慌を来し、使いものにならなくなった新人二名をそれでも生還させるべく、カノンとブレンダンのベテランコンビが選択した作戦は、自分達を囮に使うことだった。

結果兩名はしばしのあいだ消息を絶ち、一時は殉職という噂までもがまことしやかに囁かれ、新人達の顔色は終日紙のようだった。責任を感じていたのだろうか。

が、誰も彼等を責められまい。彼女とて、新兵もいいところだった時分には、敵の襲撃を予感しながら足が大地に根を張ったように動かなく、みすみす眼前で先輩を殉職させた苦い過去を負っている。初っ端から十全にこなせる奴のほうがかどうかして、可愛げがなく、却って信用がおけないものだ。

幸いにしてカノンは彼女が語った通り回収され、ブレンダンは自力で帰還してみせた。

あまり前の話ではない。そのとき彼女の意識は裏にまわって、表層には「彼女」が出ていたが、そんなことを知るよしもない台場カノンは、ここで彼女と会話したと認識しただけだ。

はず、なの、に――。

(……何故、なにも言わんのじゃ?)

にここにこと、穏やかな微笑みを湛えるばかりで口を開こうとしないカノン。総てに對して鈍感になっていた彼女の心が、このときにわかにかに息づきだした。

しばしの間、二人の間に沈黙が降りる。彼女の人生に於いて、これほどまでに耐え難い、居心地の悪い数十秒は例がない。

「ま、まあ、それはいいとして」

たまらず、折れた。

(まさか)

と膨らみきつた疑念があるが、ひとまず無視しておく。

「何用じゃ。よもやそれを言うただけに、わしの目覚めを気長く待つほどぬしア暇人であつたのか」

「まあ」

心外な、という顔をした。

「事情は色々なんですが、部隊編成にあぶれちやいまして。ほら、新人さん達が入って、こここの所帯もずいぶん大きくなつたでしょう? だから体裁だけはアナグラの防衛用戦力の中に位置付けられてるけど、実質フリーなんです。ひとりで出撃するのは、いくらなんでも危ないですからね」

目の前に接触忌避アラガミを単騎で狩りまくった怪物がいるが、これはあまりに特殊過ぎて参考にはならない。

「あなたこそ、どうしてここで寛いでたんです？　初めて見ましたよ、この時間帯にあなたがのんびりしているところ」

「あ……」

——暇さえあれば出撃している。じつとしてられないのか。

——あいつは、いつ休むんだ。

これらの風聞は伊達でない。カノンにしてみれば、白昼街中で亡霊にでも対面したような驚きだったのではあるまいか。

「べつに、大事ない。溜まった休暇を消化しておるだけよ」

「えっ、ここで、ですか？」

「以前、ツバキ教官にも似たようなことを訊かれたのう。左様、そうじゃよ、悪いかね」
「いえいえ。むしろ助かりました」

どこか投げやりな彼女の態度にも、カノンは一切頓着する気配がない。花の開くような笑顔を浮かべて胸の前で手を合わせた。

綺麗というより可愛らしい。この形容こそがよく似合う微笑ましい姿だ。微笑ましい、筈なのに——どうしたことだろう、開いた「もの」が野辺に咲く一輪華にあらざし

て、食虫植物に見えるのは。

「助かった、とは？」

眼をこすりながら、彼女が問う。

「えへへ、実は、ですね。今言ったのは半分なんです。もう半分はご想像通り、あなたにちゃんとした用事があつたから、こうして椅子をあつたためてたんですよ」

「ほほう」

相槌を打ち、先をうながす。

「えつと、どこから話せばいいのかな。そう、さつきも触れた新人さん。私、あのふたりにすっかり慕われちゃってるじゃないですか」

「身を挺して彼等を守つた実績があるからの。あれで恩義を感じねば人ではないわな。特にアネットなどで、お主を仰ぐこと神のごとしじゃ」

「そんな、大袈裟ですつてば」

「だが、満更でもないんじゃないやろう。頬があからさまに緩んでおるぞ」

「そりゃ」

と、カノンはいっそ開き直つてみせた。

「そうですよ。まともに先輩扱いしてもらえないなんて、私これをはじめてですもん」

「おお、言われてみれば」

アリサにコウタ、そして彼女。

この三人もカノンにとつては後輩にあたるが、コウタはアレだし、アリサも赴任当初は無用に肩を張ること甚だしく、とても可愛げのある後輩とは言い難かった。

彼女に至つては論外である。もはや語るまでもないだろう。

「だから、今回のことはとても嬉しかった。しばらくはそう舞い上がっていられたんですけど、でも、冷静になるにつれて段々と不安が増してきちゃって」

「不安？」

「はい。ほら、私つてそのう、いろいろと不名誉な称号を付けられてるじゃないですか。それつて実戦でさんざんミスを重ねてきた代償ですよ。こんなままじゃ、いつかあの子達もあきれて離れていくんじゃないかしら、と」

「なるほどな」

手に入れるからこそ失う恐怖が発生する。だったら始めから何も求めなければいい、さすれば心は安泰だ、と賢しら顔でのたまう輩も存在するが、真正の馬鹿だ。鶏にも劣る懦弱な発想、真面目にとりあう価値もない。

「ふむん。わしが見るに、あやつらはお主の実力というよりも、その心意気に打たれたゆえの敬慕であるから、それは杞憂と思うがの」

「いいえ、駄目なんですよ。そんな樂觀に胡坐をかいてちゃ」

「はっ、言いよる」

「だから私は決心しました。実力的、技能的にもあの子たちの先輩として胸を張れるようになろう、と」

ぐっと拳を握り込み、カノンは宣誓してのけた。風貌、堂々としていて強靱な意志が読み取れる。

(天晴れ、見事な心意気よ)

太陽を直に仰いだように、まぶしげに。彼女は両目を糸のように細くした。

「それで、第一歩としてまずはあなたに手伝って欲しくて」

「わしにか？ むう、協力してやりたいのは山々じゃが、わしの戦闘方式は射撃を核としておらぬゆえ、あまり参考にはならないと思うぞ？」

「いえいえ、いいんですよ。ただ、今すぐ一緒に出撃さえしてくだされば」

「——なに？」

彼女は耳を疑った。この娘は自分の話を聞いていたのだろうか。

「言ったであろう、わしア休暇中ぞ」

「協力してくれるって言いましたよね」

「ぬ」

確かに山々とは言った。それも、まだ舌の根乾かぬうちに。

「訓練だけじゃどうしても限界があります。やつぱり実戦の中で試行錯誤して経験を積まない。そうは言っても実戦は実戦、相手は本気でこちらの命をとりにくる、何が起きてもおかしくない戦いの場。そんなところで暢気にあれこれ実験だなんて、あなたと一緒にでもない限り、とても出来たものじゃありません」

「おやおや、これはまた随分と信用されたものじゃ」

「何をおっしゃいますやら。あなたが言ったことでしょう、自分と共に出撃^でる以上、決して死なせなどしない、と」

「――」

ああ、そうだ。確かに彼女はそう言った。アーク計画発動直前、惑うカノンを戦場へ引つ張って行く間際、傲慢にも。

（覚えて、いたのか）

「さ、そうと決まれば早速出発しましょう。時間は有限です、大事につかわなくちゃ」
「分かった、分かったから、ぬわっ、そう急かすな。引つ張られずとも自分で歩ける、何処にも逃げなどせんわい」

まるであのときの焼き直しである、配役はまるつきり逆転しているが。

……それにしても、カノンのこの強引さは怪訝であった。ときには気弱な印象さえしたこの娘が、どうしてかくも押し強い存在に変貌したのだろうか。

後輩を失望させたくないから、という動機にはなるほど一定の説得力を認めていい。だが、それが休暇中の同僚を半ば強引に引つ張り出すなんて非常識も甚だしい真似をさせるほどのものだろうか、と問われれば、これは首を傾げざるを得ない。事と次第によつては、後々懲罰も有り得よう。

確実に、何かある。それほどのリスクを負つてでも、いま彼女を戦地へ引つ張り出さねばならない、何かが。

(まあええ)

ところが彼女は看過した。どうにでもなれ、後は流れに任せるのみよ——と、自棄的な諦観に従つて、あらゆる疑念を投げ棄てた。

もう少しよく視ていれば、カノンの瞳、その奥に。神機を握つたときのみ燈る、あの剣呑極まりない輝きが、仄かに見え隠れしていると気付けたらうに。

(戦っている最中に、わしの時間が切れぬよう祈るばかりよ)

馬鹿な話で、そんな的外れな思考ばかりを展開していた。

※ ※ ※

「かあ、ふっ——」

天地が逆転した。だけに止まらず、更に二転、三転とする。顔でおもいきり地面を擦った。視界は白濁し、口中に充満した鉄の味が鼻腔にまで抜けてきた。

満身創痍、という以外にない。

(なんぞ)

と、彼女が現実逃避と嘆きとを同時に行いたくなるのも当然である。既に超直感は失われたにも拘らず、骨の髄まで染み付いた戦闘動作は完全にそれを前提としたものなのだ。

必定、齟齬が生まれる。肝心なところが食い違い、アラガミの猛攻をいのように受ける破目になる。

どこまでも空虚な残影では所詮こんなものか。せめて残骸ならば僅かな恩恵を精妙に使い続けることで、だましまし戦えたらうに。

まあ、それとて一手の打ち間違ひも許されぬ、虚空に張った一本の絹糸を渡り行くような難題であるが、今迄はそれで罷り通れた。

が、もう駄目だ。大元の彼女が死した今、絹糸すらも消え失せた。

(これではあやつがリンドウと対面しても、返り討ちに遭うだけではないか)

実際、勝率は四割程度だろう。培ってきた経験が如何に多量といえども、所詮常識の範囲内。あの理不尽なまでの強さを再現することは、確実に不可能と言ひ切れる。

散々殺した後のことばかりを心配してきたが、画餅、取り越し苦労だったかもしれない。

かてて加えて弱り目に祟り目でも言うべきか、こういうときに限って事前の索敵網に引つ掛かりもしなかったアラガミが、わらわらと群を為して大結集したのである。

ディアウス・ピター、テスカトリポカ、ハガンコンゴウ、セクメト、ゼウス……その力の強大さは、いちいち説明するだに愚かしい。木っ端アラガミだけならまだしも、こんな化け物達まで勢揃いしているのだ。百戦錬磨のベテランチームでもこの光景を前にすれば、

——俺は今日、ここで死ぬ。

いっぺんに心を折られかねない。今の彼女には、どう考えても荷が重すぎた。

(そんなに殺したいかえ、このわしを——)

そうとしか思えないのである。

これまで散々虐殺の憂き目に遭わされ、脅かされてきた怨みつらみを晴らそうと、弱体化をいいことにこの仇敵——人間の分際で神を畏れず、喰らい墮とす天外の不敬者たる彼女の四肢をもぎ、千切り、生きながらにして湯気のたつはらわたを貪り喰らうという、大目的に導かれて結集あつまったとしか。

(もてもてよの)

間の抜けた思考を、背後から飛来した弾頭がぶち抜いていった。

「射線上に入るなんて、私言わなかったっけ？」

挙句の果てが、これである。カノンの言った試行錯誤とはいったい何を指していたのだろう。いつそ彼女の頭を狙い撃つのが目的だったのではないかと思うほど、その誤射はいよいよ冴え渡り、間もなく三十の太台を突破しようとしていた。

吹き飛ばされた先にディアウス・ピターの大木のごとき爪牙が風をまいて迫っていたり、トマホークにキスしかけたりしたこともある。

それも一度や二度でない。彼女はカノンの異名を理解した気でいたが、どうもまだまだ認識が甘かったようだ。今になって漸く、他のゴツドイーター達と同じ世界を共有した。

（——なんで）

本日幾度目の土の味になるだろう。血まみれのずた袋のように這いつくばって、改めて思う。

何故まだ死んでいないのか、彼女自身よく分からない。絶望し、悲嘆に暮れるのも自然であった。

（なんで、その目は）

……いや、待て。否だ。これは嘆きなどではない。

彼女はただ、カノンのみを見ていた。霞み、澱んで、色を失い、徐々に閉じゆく視界の中で、それでもどうか誤射姫の像を捉えんと、焦点を合わせようとする。

やがて、視線がぶつかった。

半死半生の彼女に向ける、カノンの瞳は冷えていた。

どういう感情の漣もない。

怒りも、失意も、激励も、およそ熱を伴う情感を一切欠いた氷の眼差し。眼窩の奥にぼつかり空いた絶対零度の白い穴。そういうものに直面し、

(やめろ)

彼女の筋という筋が、名状し難くのたうった。

(無^なみするといふのか。あし^らうといふのか。よりもよつて台場カノン、お主が——この、わしを)

が、それもよく考えれば当たり前のことかもしれない。

彼女は自らを死人と評した。ただの抜け殻、もはや何の役にも立たない死人だと。

戦場に於いて死者に拘泥するほど愚かな真似も他にない。死骸は打ち捨て踏みつけて、なんら顧みぬのが鉄則だ。でなくば自分まで死体の仲間入りをする。

しかし、これはどうしたことか。その当たり前が血という血を逆巻かせ、彼女に総てを忘却させた。

彼女は、狂った。

激怒した。

「つ、ぎ、けるな……」

視線の主が、たとえばアリサだったなら、彼女の精神はかくも激烈な反応を示さなかつたことだろう。むしろ、よくぞここまで成長した、その目が出来れば何の心配もない、と安堵する公算こそ高い。

コウタでもそこは同じ。サクヤ、ソーマ、レン、ジーナ、ツバキ——シオですら不能に違いない。

ただひとり、カノンだけが。……億の罵倒、兆の雑言、京の悪口よりも鋭く、深く。彼女の魂、その最奥に至るまでを、たったひとつの視線のみで炎上させた。

「おっぐ、うあ——ぐ、ふあっ」

ごぼごぼと、血泡をふきながら立ち上がる。辛うじてもいいところだ。その足元はおぼつかず、もう見るからに頼りない。

が、そんな状態であるにも拘らず、彼女は死角から大口開けて飛来したヴァジュラテイルを軽々かわし、かわしざまに一閃を見舞い、地面に着く前に絶命させてのけていた。

紙一重の処を間一髪のタイミングで通過させ、即刻急所に反撃を打つ神懸りの回避技能。

視覚に頼ったものでない。

聴覚？ 触覚？ 嗅覚？ 味覚？ ——否、否、否、否、断じて否。

五つのうちのどれでもない、第六の感覚。その発動に他ならなかった。

有り得ぬことが起きている。されども彼女がその事実には気付くことはない。思考などどうの昔に消し飛んだ。そんな馬鹿など何処かで誰かが悲鳴を上げたが、むろんこれも聴こえていない。

そう、あれこれ考えられるようでは駄目なのだ。思考とはすなわち余裕のあらわれであらう。

畢竟、必要なのはただ一念。「諦めない」だの「自分は残影」だの、みみっちいお小言・小理屈などは一切不要。

その種の猪口才な思慮ごとき鎧袖一触で跡形もなく粉碎する、天地万物を染め上げんばかりの圧倒的な激情の奔流。

これが、これのみが唯一彼女を再臨せしめる道だった。

忘我の感動によって取り憑いた妄念が、忘我——というより我を粉々に砕きかねない次元違いの憤怒によって焼き祓われる。

「ふ、ぎ、けるなアア——ッ！」

背を反らし、天を仰いで絶叫する。そのあまりの凄まじさに、一瞬この場に集まった

総てのアラガミが動きを停止^{とめ}した。

狩る者と狩られる者が逆転したと気付けたのは、果たしてその内の何割だったか。

まあ、気付こうが気付くまいが何の関係もない。アラガミひしめく直中に、脇目もふらず飛び込んだ彼女は、その全身で獲物の塵殺を告げていたのだから。

散々大袈裟な表現を用いたが、この一件、蓋を開けてみればなんとということもない。

誰にだっているだろう。こいつにだけは負けたくない、こいつになめられるのだけは我慢がならぬ——と、問答無用でやたらめったら対抗心を煽られる、そんな他者の一人や二人は。

朋友であり、同時に不倶戴天の宿敵でもあるかのような奇妙な「誰か」の存在は、人生に於いてあらゆる意味で重要だ。

だが、何故彼女にとつてのそれがカノンだったのだろうか。所属する部隊も違うし、基調とする戦闘スタイルもまるきり異なっているというのに。

——答えは簡潔、そして明瞭。思い当たるふしなど、たったひとつしかないだろう。

台場カノンこそが天上天下に唯一人、全盛期の彼女に対して直撃打をぶち込んだ存在だから。

あの日、あの時、あの瞬間。己が増上慢をへし折られた歓喜に噎ぶ一方で、彼女の深層心理では、カノンを同位同格のモノとして認める作用がつつがなく進行していたのである。

だからなんということもないと、珍しからぬ話といった。女性が己がはじめてを奪った相手を特別視するのは、道理すぎるほど道理である。おそろしく古い価値観を掌中の珠よと愛好する彼女の場合、なおのことであつたろう。

「今日の占い、すつごくよかつたんですよ」

傷だらけの顔を精一杯破顔させ、カノンが言う。

ふたりを除いて、動くものは何もない。

霸王も帝王も天主でさえも、皆一様に刻まれ、砕かれ、解体されて踏み躪られた。彼等の屍骸で地面が見えなくなるほどだ。

「特に待ち人が、ですね。遅れるが、必ず来ると、出ていまして」

「——ああ」

その一言で確信した。どの程度かは不明だが、カノンは彼女の変調に気付いていた。彼女にとっては不可思議この上ない話だが、カノンの側からしてみれば、これまた当

然の帰結といえる。

出撃前、エントランスでカノンが彼女にこう語った。慕われるのは初めてだ、と。

だがしかし、特別視していた者ならば、ずっと以前から他にいる。

誤射姫だの人間砲台だのと呼ばれ、悪意を以って蔑まれはせずとも、「仕方のないヤツ」程度にばかり思われていたカノンを、唯一人純粹に高く買い続けてきた変わり者が。

女は感情の生き物である、という。

それだけに、他者から向けられる感情の察知能力に関しては、男などの比ではない。

(なにか勘違いをしているに決まっています)

いつか実態を知り、失望するにちがいない。そう信じて疑わなかったが、その人物から向けられる視線の質はいつまでたっても変わらなくて。

自分に対し明らかに好意を持つ相手は無碍に扱えるほど、カノンの血は冷たく凍っていないから――。

上の事情を、彼女は知らない。これからも知ることはないだろう。

けれど、何かしら感じるものは確かにあった。

「そりゃあ、めでたいのう……」

一片の邪気すら含まない、赤子のごとき無垢な微笑をしてみせて。

彼女はカノンの肩めがけ、崩れ落ちるように身体をあずけた。

「あら、まあ」

「許してたもれ。わしア、少し、疲れたよ」

どれほど戦い続けたのだろう。気付けば太陽はすっかり傾き、山の端に隠れる準備をはじめていた。

この一週間後、星の降り注ぐいい夜に、ひとりのゴツドイーターが極東支部へ帰還している。